



月刊 もぐら通信

Mole Communication Monthly Magazine

2022年3月1日 第112号 第三版

www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地に届きます

港には、不思議と人をひきつけるものがあるようだ。人間をとりまく空間の謎をとく鍵が、その錆色の風景のどこかにかくされてでもいるように、人は港に立って、胸をときめかせる。(略)

港ばかりでなく、ときには決まったレールの上を走る列車の駅さえ、旅情の舞台につかわれることがあるらしい。以前、北満の小さな駅で、ホームにピクニックに来ている、白糸露人の老夫婦を見かけたことがある。火のように赤いカンナの花の下に、毛布をひろげ、列車にむかってニコニコ笑いかけながら、ゆっくりと弁当をひろげているのだ。まるで絵本のようなと思った。港をもたない大陸の住人にとっては、おそらく、そのプラットフォームが未知の世界を夢みる唯一の通路だったのだろう。

(『羽田空港』全集第17巻、42ページ)：1963年1月6日)



土佐足摺岬



安部公房の広場 | www.abekobosplace.blogspot.jp



『S・カルマ氏の犯罪』の最後に登場する
非ユークリッド空間を映写する映写機

目次

- 1 目次…page 2
 - 2 記録&ニュース&掲示板…page 3
 - 3 『周辺飛行』論（24）：仮面について——周辺飛行 21：岩田英哉…page 11
 - 4 **AS TRANSTEXTUALIDADES NA OBRA *O ROSTO DE UM OUTRO DE ABE KÔBÔ*, COMO O DISCURSO DO MONSTRO** [ポルトガル語によるご寄稿]：間テキスト性におけるモンスター・スピーチとしての「他人の顔」：Jovanca Ichikawa：翻訳 岩田英哉…page 19
 - 5 安部公房の愛読者のことを何と呼ぶか：岩田英哉…page 25
 - 6 *Mole Hole Letter*（46）鯨と雁 ～疫病・戦争・共産主義～：岩田英哉…page 27
 - 7 Topologyで日本の文化を解説する「内なる辺境」シリーズ（7）：紐（ひも）：岩田英哉…page 36
 - 8 ネット・メディア論（6）：おやすみ：岩田英哉…page 40
 - 9 縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（5）：おやすみ：岩田英哉…page 41
 - 10 編集後記…page 44
 - 11 次号予告…page 44
- ・連載物・単発物次回以降予定一覧…page 42
 - ・本誌の主な献呈送付先…page 45
 - ・本誌の収蔵機関…page 45
 - ・編集方針…page 45

PDFの検索フィールドにページ数を入力して検索すると、恰もスバル運動具店で買ったジャンプ・シューズを履いたかのように、あなたは『密会』の主人公となって、そのページにジャンプします。そこであなたが迷い込んで見るのはカーニヴァルの前夜祭。

ニュース&記録&掲示板

The best tweets 10 of the month



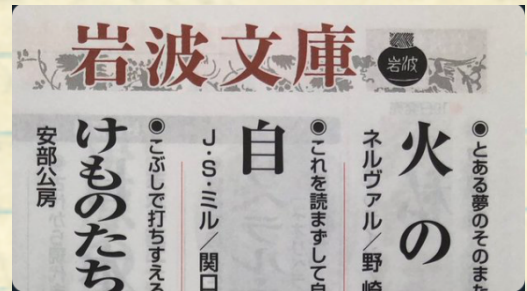
箱入りミミック@hakoiri_mimic・Feb 16
私のダディは安部公房です。
お稚児@chigo_jo・Feb 14
ふふ 安部公房さんはわたしも好きです



藤井龍一郎@kyawasemi・Feb 14
もう坂口安吾と安部公房しか読みたくない。
Kenny / ALFRD@Kenny__alf・Feb 12
久しぶりに安部公房読んでたら頭おかしくなってきた

今月のけものたちは故郷をめざす

岩波文庫編集部@iwabun1927・Feb 18
来月の新刊は、この3点を予定しています。
ネルヴァルを愛する野崎歓さんの『火の娘たち』新訳。
「自由」についての必読書、ミル『自由論』の新訳。
そして安部公房作品初の岩波文庫入り。
ご期待ください。



猫の泉@nekonoizumi・Feb 15
岩波文庫3月。「満州に育った日本人少年・久木久三は、1945年8月、満州国崩壊の混乱の中、まだ見ぬ故郷・日本をめざす。荒野からの逃走は、極限下での人間の存在を問う実験的小説であり、サスペンスに満ちた冒険譚でもある。…」
⇒安部公房『けものたちは故郷をめざす』

ホッタタカシ@t_hotta・Feb 6
安部公房『けものたちは故郷をめざす』の岩波文庫版、解説はリービ英雄。
【けものたちは故郷をめざす - 岩波書店】

藤原編集室@fujiwara_ed・Jan 22
岩波文庫の3月予定 (同社メルマガ情報)
『火の娘たち』ジェラルド・ド・ネルヴァル (野崎歓訳)
『自由論』J・S・ミル (関口正司訳)
『けものたちは故郷をめざす』安部公房

今月の安部公房追悼

昭和ガイド@showa_g・Jan 22

27年前の今日、安部公房が亡くなりました。日本の小説家、劇作家、演出家。代表作は『砂の女』『箱男』『燃え尽きた地図』など… ⇒安部公房の写真、名言を紹介。
昭和ガイド <http://showa-g.org/men/view/68> #今日は何の日



今月の記録芸術論

ホッタタカシ@t_hotta・Feb 9

62年前の安部公房エッセイが復刻。現代芸術における現実感の喪失は、モラルの欠如でもリアリズムからの逸脱でもなく「方法」への自覚が乏しいこと、と説く。

【安部公房エッセイ 「記録精神」について——二つのリアリズム 「週刊読書人」1958（昭和33）年5月19日号】

<https://dokushojin.com/article.html?i=6615>



安部公房エッセイ 「記録精神」について——二つのリアリズム 「週刊読書人」
リアリズムというのは、要するに、とらえる対象を現実においているということだと思ふのだが、日本ではむしろ、通念として、現実そのものよりも現実...
© dokushojin.com

今月の天下無敵の筋金入り早熟箱男

と影@KrijggXZo4ZxRtN5・Feb 1

深夜の読書本

箱男

安部公房著

安部公房は榎本武揚を描いた作品で知った。箱男は小学6年の時に初めて読んで五里霧中五言絶句。全く意味が分からず、その意味の分からなさを読書感想文にしたら賞を獲った。その後も折に触れ読む事16回

面白いのだが果てしなく分からない多分私はまた読む だから良い

純文学書下ろし特別作品

箱男
安部公房

今月の安部公房読者男に憧れてゐる読者女

順子@terayama459mmm・Jan 28

先日ふと安部公房の本を引っ張り出したんですけど、一番最初にクソメンヘラるほど

好きだった男の人が安部公房好きだったのよね…私も好きになったし、安部公房読む男性はいいよなァ〜神保町別行動デート（同人誌即売会風デート）したいナァ〜

今月のデンドロカカリヤ

布施英利（ふせ ひでと）@fusehideto・Feb 7

人体の解剖をしていると、血管や肺の気管支の分岐などが、植物の根や枝分かれに似ていて、つい「人体の中には植物がある！」と考えてしまう。医学部出身の安部公房に『デンドロカカリヤ』という短編があって、男の体がひっくり返って植物に変身してしまう話。・・・西野達の新作にも、似た感覚があった。



今月の砂の女

林千絵@chie3ume3・Feb 12

安部公房の「砂の女」の単行本を自分の版画を使って衣装替え。しおりの部分は糸を編んでみましたがまだ試行錯誤中…

こういった手作業はやり出すとキリの無いものですね



今月の棒

オダ@dd333d・Feb 19

神保町の喫茶店トロワバグで安部公房の小説を読んで作った棒プロダクト。アイデアに詰まったときはいつもトロワバグに行ってたな〜。3Dプリンタで出力してせっせとヤスリをかけた記憶があります。



今月の友達相当擬似家族映画

「パラサイト」をやっと鑑賞。

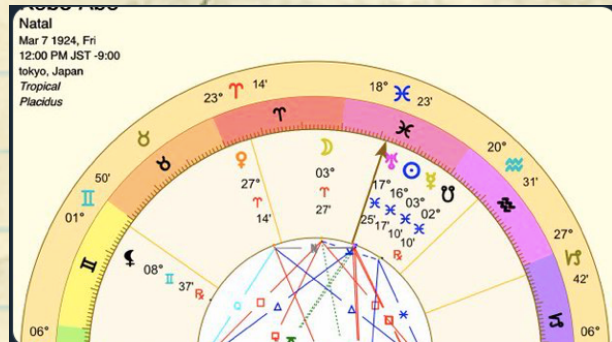
ナンセンスやユーモアというスポンジから滲み出る、感情。とても文学的だと思いました。不公平なこの世を生きる事の不条理や辛さを、切実に訴え叫ぶのが社会派だと定義するとして、その対極が文学だと私は思っています。大好きな安部公房を思い出します。



今月の魚座

hinako@cccystalshipp- Feb 18

安部公房はテープレコーダーを枕元に常備して見た夢をそのまま「生け捕りにする」と『笑う月』に書いていた。非言語体験/感覚である夢を、変質する前に「生け捕りにする」という表現に感服するし、その行為自体が魚座水星の本質っぽいと思う(けど本質を本質としてつかめないのが魚座だとも思う)。



今月の無関係な死

宮崎悠 / GraphicDesigner@you_number- Feb 16

『安部公房作品集 無関係な死』

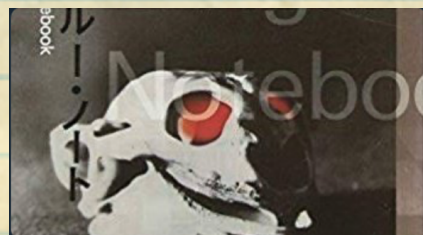
多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業制作のためのポスターグラフィックシリーズ。バレリーナが自分の爪先を持つポーズがモチーフなのだが、身体を消した時、無造作に足を投げ捨てているシーンにも見えたので、ビジュアルに採用した。



今月のカワイレ大根

粗茶屋@CINEMA&DS@LEON5334- Feb 12

安部公房の“カンガルーノート”を読みたい欲求がいよいよ限界を来たして、一刻も早くきつと埃まみれであろう実家の本棚から拝借して来なければ僕の膝小僧からカワイレ大根が生えてきそうな勢いのございます。



今月の上演

「時の崖」@わが街の小劇場 (沖縄) 2020.
2/13-19@tokinogake2020- Feb 13

(夜が明けて) 本日よりいよいよ開幕です!

本日初日は完売しす。残席ある日は、僅かですがまだございます!

予約は ▶ https://481engine.com/rsrv/pc_webform.php?d=35bb4137ea&s=&...

安部公房の今作とまっすぐ向き合い続けた演出家と俳優の、2人の男の作品です。
舞台の上に生きる一人の俳優、男をまずはしかと目撃してみましょう。

今月の安部公房との遭遇奇縁

CrabたにぐりんAubergineChestnut@tanigreen・Feb 11

でも安部公房知ったきっかけは法学概論の講義なんだよなー。どこに出会いがあるのかわからん

今月の電話ボックス (燃えつきた地図、箱男)

非おむろ@Non_omuro・Feb 15

“電話ボックスで着替える、もとい、ヒーローに変身する、”という文化、こんなにスケスケな箱だとしても尚、(安部公房『箱男』に描かれたような)箱男さながらの空間所属性を持ちうるのか？



今月の安部公房論

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku・Feb 12

『方舟さくら丸』論--二つの<穴>,あるいはシミュラ-クルを超えて (特集 安部公房--ボ-ダ-レスの思想) -- (作品の新しい顔)

<https://ci.nii.ac.jp/naid/120002165397>

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku・Feb 12

安部公房『第四間氷期』--水のなかの革命

<https://ci.nii.ac.jp/naid/120005481595>

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku・Feb 12

書物の「帰属」を変える(3)安部公房『箱男』と虚構の移動性

<https://ci.nii.ac.jp/naid/40020255668>

今月のシャボン玉の皮

madeleine@storyforf・Feb 14

それは人間の恥部に似ている。虚しく、壮麗で、ただ存在することによってあらゆる意味を圧倒してしまう。当然のことだ。「有用性」が「廃物」に負けることはありえても、「廃物」が「有用性」に屈服したりすることはまず不可能だろう。

——安部公房「シャボン玉の皮」

今月の睡眠導入術

ペーター X@Mendels_bc・Feb 14

鯨と化して深海へ潜る、荒野を行く騎兵を次々に弓で射殺す。安部公房の睡眠導入術だそう。誰かがする旅の話が少し似ているように思われるのは日常よりも未知に安堵を覚える現実逃避、と突き放すなかれ。生き物はどうも本来、未知から来て未知に行くものらしいと言ひ残し、颯爽とゴキブリが走り去る。

今月の朗読会

柴田望@NOGUCHIS7・Jan 27

<https://fragile-seiga.hatenablog.com/entry/2020/01/27/230747...>

■ 1月25日(土) 14時より、旭川市東鷹栖公民館にて東鷹栖公民館と東鷹栖安部公房の会主催による「安部公房 ～バロック音楽と映像による朗読会『魔法のチョコレート』」を行いました。



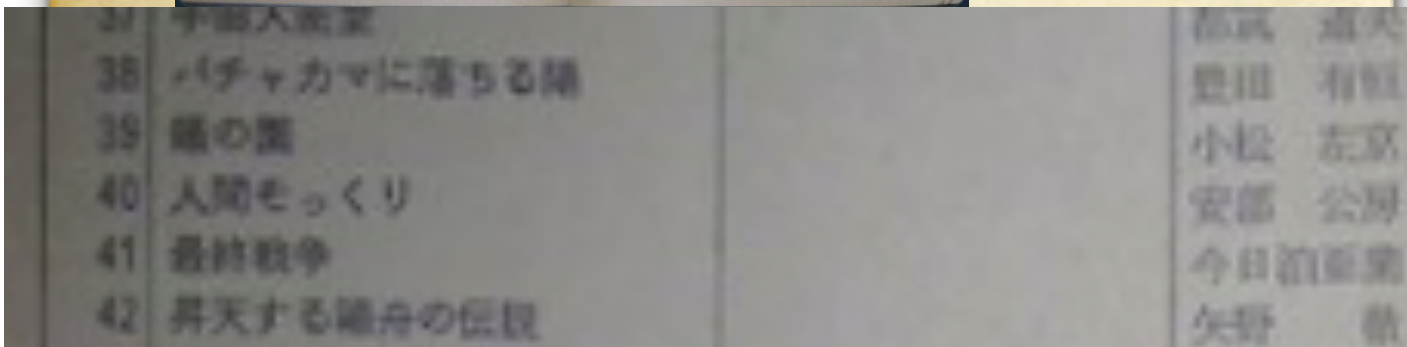
■ 1月25日(土) 14時より、旭川市東鷹栖公民館にて東鷹栖公民館と東鷹栖安部公房の会主催による「安部公房 ～バロック音楽と映像による朗読会...」
fragile-seiga.hatenablog.com

今月のハヤカワSF文庫

藤原編集室@fujiwara_ed・Jan 24

ハヤカワ文庫JA (1973年創刊)。小松左京・星新一・光瀬龍・眉村卓・半村良・平井和正・・・といった日本SF草創期の巨人たちにまじって、**安部公房**、**山野浩一**の名前も。

15 自然コンサルタント	島田 有恒 270	62 漂らざる空	眉村 卓 320
16 宇宙のあいさつ	星 新一 270	63 わがふるさとと異世界の国	半村 良 240
17 半そりなば	星 新一 270	64 異国遊園	島田 有恒 320
18 はよみかき時空六連行	半村 良 290	65 鳥はいまどこを飛ぶか	山野 浩一 280
19 星が降る	眉村 卓 280		
20 ベトナム観光公社	川岸 康雄 270		
21 悪夢のかたち	半村 良 300		
22 彼の中の世界	小松 左京 300		
23 石の道徳	半村 良 450		
24 異世界遊園	半村 良 280		
25 産業土管探検記	眉村 卓 280		
26 午後のはじめ	星 新一 280		
27 ある生き物の記録	小松 左京 300		
28 カナシ199年	光瀬 龍 320		
29 世界の夜	島田 有恒 280		
30 アルファルファ作戦	川岸 康雄 290		
31 ムーン・バスター	高野 正 280		
32 多聞寺日記	光瀬 龍 330		
33 悪魔の目	小松 左京 330		
34 謎の島	星 新一 270		
35 アロンは終った	眉村 卓 330		
36 幽くのはほろひ	小松 左京 330		
37 宇宙大空軍	島田 有恒 330		
38 パチャカマに落ちる時	島田 有恒 250		
39 鏡の裏	小松 左京 240		
40 人間そっくり	光瀬 龍 330		
41 最終戦争	今井道雄 330		
42 昇天する船中の伝説	矢野 龍 290		
43 本邦第一級探検記	小松 左京 330		
44 夜半	島田 有恒 330		



ADスティーブ・ナカムラさんの本棚を拝見！「自分が特別に好きなもの以外は所有しない」 | ニコニコニュース：<https://news.nicovideo.jp/watch/nw6412900>

「スティーブ・ナカムラさんへのQ & A

Q どんなタイミングで本を買いますか？

A 週に2冊のこともあれば、1か月に1冊のこともあり、まちまちです。何かインスピレーションが欲しい時に本屋に行って買います

Q 影響を受けた作家は？

A 1920年代にドイツで活躍した写真家アウグスト・サンダーの『Citizens of the 20th Century』と、安部公房の『砂の女』

Q 好きな書店は？

A 神保町の小宮山書店と、ボヘミアンギルドです。どちらも現代アートや写真集、美術書が充実しています」



武漢発生のコロナウイルス

アメリカのサイトで、武漢発生のコロナウイルスの最新の拡大状況を世界地図で示すサイトを見つけましたので示します。

お役立て下さい：

<https://www.cdc.gov/coronavirus/2019-ncov/locations-confirmed-cases.html>

今月の読書会

『砂の女』読書会（第18回KAP）

2020/3/29（日）13:00に高槻市立文化会館（集会室301号）にて、第18回関西安部公房オフ会（略称KAP）の読書会を岡田さんとともに開催します。課題本は『砂の女』です。

言わずと知れた安部公房の代表作です。砂丘に昆虫採集にきた教師が、村人にはめられ、過酷な砂掻きを強要されることになる。様々な脱出の試みがことごとく失敗に終わるうちに、教師の内面にも変容を来す。いろんな解釈ができると思います。みなさまと感想を意見交換したいと思います。開催要項の詳細は、以下をご覧ください。

<http://w1allen.seesaa.net/article/472863438.html>

初参加大歓迎です。課題本を読んでいただければ、誰でも参加申し込みいただけます。「KAP読書会の紹介」や以前の読書会報告を参考にいただければ、幸いです。

<http://w1allen.seesaa.net/>

から読めます。貴方の来訪を心よりお待ちしております。近くの餃子の王将で二次会
もあります。こちらもお気軽にご参加ください。今回はネット中継はありません。主
宰者だけを映したものを後日公開します。過去の録画は、
<https://www.youtube.com/user/w1allen/videos>
でご覧になれます

一読書会という舞台装置が、他者への通路を開くキッカケになることを夢見て—
<http://w1allen.seesaa.net/>

今月の雪乞いする箱男



豊岡で雪乞いの神事 兵庫県内で記録的な雪不足



『周辺飛行』論

(24)

3. 『周辺飛行』について (19)

『仮面について——周辺飛行21』

岩田英哉

仮面と云へば、安部公房の存在論による仮面論の答へ、即ち素顔・仮面論または本質・現象論の答えは、この「周辺飛行」以前に幾度も引用して解説をした実際には16年後に行はれたジュリー・ブロックとの対談(1989年)で既に明らかであり[註1]、それは、いつもながら、次に再掲する「安部公房の主観・客観等価交換表」にある通りです。この素顔・仮面論といふ実存・存在論を舞台藝術に応用したのが、安部公房のニュートラルといふ演技論の核心概念なのです。

この対談は、この演技論が既に十代の安部公房に萌(きざ)してゐたといふ証拠であると同時に(これを更に当時のこととして一層証明するには成城高校時代も含め「広義の初期安部公房」[註2]時代に書かれた『没我の地平』内外の詩篇や『無名詩集』中の詩篇を読めば解ります[註3])、奉天の中学生の時に家にあつた世界戯曲全集を読破したといふ安部公房が、戯曲家として此の間養ひ育てた下掲表の種を今度は舞台藝術の畑に撒いて、安部公房スタジオといふ果樹園で芽吹かせ大きな樹木に育てた(リルケをトポロジーで読んで学んで)形象化した「イメージの展覧会」なのだといふことを、文字の上にもまた行間に、明示・黙示に示してゐます。

安部公房の「主観・客観等価交換表」		
(非ユークリッド幾何学の世界=topologyの世界)		
「僕の中の「僕」」といふ話法に於いて		
SUBJECT	OBJECT	
主観	客観	西洋 哲学 用語
主辞	賓辞	
主体	客体	
読者	作者	安部 公房 の 哲 学 用 語
自己の主体	客体化された自己	
「私」	実存	
素顔または単に顔	仮面	
本質	存在	
<div style="border: 1px solid blue; padding: 5px;"> 安部公房の超越論(安部公房の空間論= ≡汎神論的存在論≡topology(接続と変形の数学) </div>		
↑		
<div style="border: 1px solid blue; padding: 5px;"> 等価交換の境界線(上位接続線= ≡無時間の接続(conjunction:論理積)の上に生きてゐる </div>		

〔註1〕

成城高校時代の親しき、哲学談義を交わした友、中埜肇が次のような安部公房の姿を書き残しております。

「たしか高校二年の夏休前のことではなかったろうか。彼の方からそれまで全く面識のなかった私に、話したいことがあると言って接触を求めてきた。時と所をきめて改めて会うや否や、彼はいきなり私に向かって「君は解釈学についてどう思う」と切り出した。（その時の彼の言葉だけは五十年以上経った今でも私の耳にはっきりと残っている。）当時既に日本でもハイデッガーの『存在と時間』の翻訳が出版され、わが国の哲学界や思想的ジャーナリズムにも「解釈学的現象学」という言葉が姿を見せていた。（中略）

当時の安部は「解釈学」という言葉をむしろデカルト的な懐疑の方法に近い意味に解していた。」（『安部公房・荒野の人』35ページ）

安部公房は、デカルトの『方法叙説』と解析幾何学の本を読んでいたのです。デカルトは、バロックの哲学者です。

安部公房が中埜肇に初めて会ったときに発した「君は解釈学についてどう思う」という問いは、18歳に成城高校の校友誌『城』に発表した『問題下降に抛る肯定の批判』の中で安部公房が、わたしは普通の社会の人間とは違って「座標」軸なしで物を考えるのだといい、「一体座標なくして判断は有り得ないものだろうか」と問い、この問いの答えが、この論文の副題「是こそ大いなる蟻の巣を輝らす光である」という言葉の由来である「これこそ雲間より洩れ来る一条の光なのである」といい、この一条の光こそが、この蟻の生きる閉鎖空間から脱出をするための唯一の方法であり、その方法とは、「遊歩場」という「道」、即ち時間も空間もない抽象的な上位の次元の位相幾何学的な場所の創造であり、その為の方法が「問題下降に抛る肯定の批判」だといっています。

また、中埜肇の言う「当時の安部は「解釈学」という言葉をむしろデカルト的な懐疑の方法に近い意味に解していた。」という正確な理解については、晩年安部公房自身が、デカルト的思考と自分独自の実存主義に関する理解と仮面についての次の発言がある（『安部公房氏と語る』全集第28巻、478ページ下段から479ページ上段）。ジュリー・ブロックとのインタビュー。1989年、安部公房65歳。傍線筆者。

「ブロック 先生は非常に西洋的であるという説があるけれども、その理由の一つはアイデンティティのことを問題になさるからでしょう。片一方は「他人」であり、もう片一方は「顔」である、というような。

フランス語でアイデンティティは「ジュ（私）」です。アイデンティティの問題を考えると、いつも「ジュ」が答えです。でも、先生の本を読んで、「ジュ」という答えがでてきませんでした。それで私は、数学のように方程式をつくれれば、答えのXが現れると思いました。でも、そのような私の考え方すべてががうことに気づき、五年前から勉強を始めて、四年十ヶ月、「私」を探しつづけました。

安部 これは全然批評的な意見ではないんだけど、フランス人の場合、たとえば実存主義というような考え方をするのはわりに楽でしょう。そういう場合の原則というのは、「存在は本質に先行する」ということだけれども、実は「私」というのは本質なんです。そして、「仮面」が実存である。だから、常に実存が先行しなければ、それは観念論になってしまうということです。

ブロック それは、西洋的な考えにおいてですか。

安部 そうですね。だけど、これはどちらかというと、いわゆるカルテジアン（筆者註：「デカルト的な」

の意味) の考え方に近いので、英米では蹴られる思考ですけどね。」

(「リルケの『形象詩集』を読む(2)：『或る四月の中から(外へ)』」(もぐら通信第33号)より)

上掲の「安部公房の主観・客観等価交換表」は、このジュリー・ブロックとの対談の上記下線部を知って作成したものです。

[註2]

『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について(1)』の中の「I 安部公房の自筆年譜と『形象詩集』の関係について」(もぐら通信第56号)より：

初期安部公房の定義

『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』といふ題でお話を致しますが、ここでいふ安部公房文学の「初期」といふ言葉の定義について最初に簡単に説明をして読者のご理解を得てから本題に入ります。

この場合の「初期」とは、既に「『デンドロカカリヤ』論(前篇)」(もぐら通信第53号)にて明らかに致しました「詩人から小説家へ、しかし詩人のままに」のチャート図に基づいて定義をすると、次のやうになります。

1. 狭義には、3つの問題下降の時期、即ち詩人から小説家への変身に3回の問題下降によつて美事に成功する時期、即ち全集によれば詩集『没我の地平』を著した西暦1946年(昭和21年)安部公房22歳から『デンドロカカリヤB』[註1]を著した西暦1952年(昭和27年)安部公房28歳までの期間を言ひ、

2. 広義には、3つの問題下降以前の時期、即ち西暦1942年(昭和17年)安部公房18歳から西暦1944年(昭和19年)安部公房20歳までの問題下降論確立の時期及び、西暦1945年(昭和20年)安部公房21歳までの1年間を含んだ時期を併せた全体の時間を言ひます。

[註1]

「『デンドロカカリヤ』には二種類あります。一つは、全集によれば「雑誌「表現」版」と呼ばれてゐるもの、もう一つは、「書肆ユリイカ版」と呼ばれてゐるもの、この二つです。便宜上、前者を『デンドロカカリヤA』と呼び、後者を『デンドロカカリヤB』と呼ぶことにします。前者の発行は1948年8月1日、安部公房25歳の時、後者の発行は1952年12月31日、安部公房28歳の時です。この二つの作品の間に、『S・カルマ氏の犯罪』で芥川賞を受賞してゐます。」(「『デンドロカカリヤ』論(前篇)」もぐら通信第53号)

[註3]

『没我の地平』の例を挙げれば「詩人」「主観と客観」「実存」「仮眠(まどろみ)」など、『無名詩集』の例を挙げれば「笑ひ」「マスク」など。「笑ひ」の乾燥に耐えて成長した樹木が「祈り」の果樹園の樹木であり(虚構の世界)、現実にもりとして結実したのが「リンゴの実—真知の為に—」である(現実の世界)。

初期安部公房の努力が後者の虚実に残る叙情をも(リルケの論理により歌はれたリルケの詩『涙の壺』の)「涙の壺」に仮託して此の壺にある水分を徹底的に蒸留することであり(『世紀の歌』全集第1巻230ペー

ジ)、これが安部公房が共産主義に身を投ずる契機と一致してゐること、これが安部公房が散文家になるための出発点であるといふことは諸処既述の通り。

初期安部公房論『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』はもぐら通信第56号から第59号を、『涙の壺』論のダウンロードは：<https://docdro.id/YL3pogc>。また、『魔法のチョーク』論(もぐら通信第52号)をご覧ください。

「周辺飛行21」に書かれてゐることは、ニュートラルといふ概念は結局対概念を用ひていへば、仮面と肉体の均衡(バランス)の実現、これがニュートラルであるといふ思想を演技論の視点から論じてゐるで、要約すると其の主旨は、『他人の顔』(1964年)の主人公の求めた仮面と素顔を巡る意識と肉体の関係のあり方其のものなのです。

この回の周辺飛行の前後には、やはりニュートラル論がここかしこに述べられてゐて、その直前にある桐朋学園土曜講座『俳優表現における生理的研究』(全集第18巻355ページ)の最後の、若い俳優の卵たちへの締め括りの言葉、即ち「つまり、一つ一つのことよりも、いろいろな心理的なものを生理的に置き換える訓練としてとらえてほしい。

(略)自分の生理として内側から絶えず探り出すことを研究した方がいい。」といふ言葉は、おのづと「周辺飛行21」で述べられてゐる安部公房スタジオの俳優たちへの演技指導の簡にして要を得た言葉となつてゐます。

「周辺飛行21」の冒頭の一行は、この演技論は実は演技論ではなく、演技論「以前」の演技論であること、即ち超越論的な演技論であることを示してゐます。何故なら、ニュートラル演技論、否、ニュートラル・演技「以前」演技論は、次の言葉で始まつてゐるからです。

「俳優の演技におけるニュートラルの把握は、稽古のための前提であり、それだけに実際の稽古に入ってしまうと、つい日々の作業の陰に埋没してしまいがちなものだ。」(傍線は引用者)

この稽古は「心理的なものに対して生理的なものを優先させる準備運動」であり、此の準備運動は体操として行はれ、この「体操の後でニュートラルの基本(音への集中と解除)と、心理を排除した笑い(腹筋の自律痙攣)の練習を加える。」ことによつて行はれた。即ち、

ニュートラルの稽古は、舞台のために行ふ稽古「以前」の稽古、即ち超越論的なものを、俳優一人一人の肉体が生理で理解するための稽古である、といふことになります。この論理構造化された稽古もまた、安部公房らしい。この「稽古の稽古ともいふべき」練習が、アドリブの練習です。

この練習を安部公房は「ウォーミングアップ」と呼んでゐる。「ところが、いざ台本を手にした具体的な稽古の段階に入ると、かなりの俳優たちが、ニュートラルの練習にかぎって、不思議に拒絶反応を示しはじめたのである。今回はその理由について検討してみよう。」といふことなのです。そして、この検討のための土台が、舞台の（目に見えない）土台である台本だといつて、論を述べ始める。ここに（1973年）既に最初から安部公房スタジオの最後期には台本すら不要になつた演技論・舞台論・役者論の嚆矢があります。そしてこれが、役者のための「他人の顔」論なのです。さて、

「俳優にとって、台本は、一つの出発点である。俳優は、その台本に合わせて、自分を加工し変形しはじめる。あるいは仮面をデザインしはじめる。」

一人一人の俳優は舞台に立つ、恰も『他人の顔』の主人公の如くである。上掲の「主観・客観等価交換表」を参照して下さい。この表にある主観と客観の間の境界線にゐるのが「『他人の顔』の仮面」をつけた一人一人の俳優なのです。化粧と比較すると「仮面と化粧には、似て非なるものがある。化粧の変身はあくまでもカッコ付きの変身にすぎない。化粧をした女は、化粧した自分を、あくまでも自分の本質として受け取ってもらいたがるものだ。ところが俳優の仮面は、他者になるための本質的な変身なのである。そこにゐるのが現実の俳優某ではなく、仮面によって変身した非現実であることを、はつきり見る者に意識させなければならないのだ。この相違は大きい。」（傍線は引用者）

上記引用の下線部と同じ発言を三島由紀夫との対談『二十世紀の文学』で安部公房の発言してゐるのが、上掲の表中「読者・作者」とある一項が、それです（全集第20巻79ページ以降最後のページまで）。この演技「以前」論は、「以前」論であることによつて/於いて、そのまま読者・作者論なのであり、ノートブックを階層化された媒体として利用する、（バロック小説『ドン・キホーテ』と同じ）話法多重化メタSF小説『他人の顔』論なのです。即ち、安部公房スタジオの舞台はメタSF文学の舞台であるといふことです。即ち舞台「以前」の舞台があり、台本「以前」の台本があり、稽古「以前」の稽古があり、役者「以前」の役者がゐる。

この「以前」の世界で俳優が仮面を被る（といふことは台本に書かれた役柄「以前」に配された仮面「以前」の仮面といふことになりますが、この沈黙・透明なる仮面）の其の目的は「他者になるための本質的な変身である。」と安部公房はいふのです。これは、私たち読者もまた十分に首肯することができる。何故なら安部公房の文学的・哲学的主題の一つは「他者への通路」だからです。役者もまた作家と同じ此の仕事をする。18歳の安部公房は同じ主題を次のやうに書いた。

「 轉身とか変容とか云ふ事に対して今迄何といふ誤解をしてゐたものだらう。

僕は今迄総てを内と外に分けなければ気が済まなかつた。

勿論内と外とに分ける事はこれから先も永久に続く事には異いないけれども、もつと大きな事があるのを忘れてゐたのだ。よく考へて見れば僕達が普段内面と言つてゐる様なものは、全て外面から来る想像に過ぎなかつたのではないだらうか。

(略)

第一、僕達が何時か真剣になつて外面の事を考へた事があつただらうか。」 (『僕は今かうやつて』全集第1巻88ページ上段)

この引用の「外面」を「他者」に置き換へれば、「他者への通路」といふ言葉の意味が解ります。この通路といふ二者の関係が、決して分離してゐるのではない事もわかります。その関係が想像に於いて等価交換可能だといふことに18歳の安部公房は気づいたといふことを明かしてゐる文章が、この断片的なメモの持つ、安部公房文学を理解するための重要性なのです。内面は外面であり、外面は内面である。

さて、しかし、映画スターを例に取ればわかるやうに、観客はスターである役者の仮面を固定したものとして考へ、日常生活の時間の中でも俳優何某は流行した役柄と同じ仮面を被つて生きてみると錯覚する、と安部公房は続けます。私はよくフーテンの寅さんを演じた渥美清といふ優れた俳優が、一生涯フーテンの寅を演じて本当に役者として幸せな人生だつたか、真つ当な人生であつたかと思ふことがあります。この疑念の答へは疑念の浮かぶのである以上、私の答へは否定的なのです。これに対して対比的に思ひ浮かべるのはスパイ映画007で主役を演じたショーン・コネリーといふ俳優です。シリーズの途中で役を降りたと聞いた時に、私は役者としては英断だと思ひました。ですから、その後の主役のどの映画を見てもジェームス・ボンドといふ名前は連想されず、歳とともに役者の味が出る渋い役者になつてゐます。しかし、さう思つて見れば、渥美清は映像の中では歳を取らない。役柄としても固定してゐるし、役者としても仮面が固定してゐる。ここからは私のいひ方ですが、前者は大衆に媚びず距離を保ち、後者は止むを得ずに媚びる結果となつて距離が無い。後者の役者の立場を安部公房は、仮面との関係で次のやうに言つてゐる。

「観客はそのスターが役に合わせて仮面をつくるよりも、仮面に合わせて役をつくるやうに望みがちだ。そこでスター自身だけでなくマネージャーや制作者たちまでが、トレード・マークとしてそのスターの仮面を固定しようと努めることになる。役柄をこえて存在しはじめた仮面は、もはや本来の意味での仮面とは違ったものだ。」

これに対して、安部公房が安部公房スタジオの俳優たちに説いたのは、大衆の憧れとは正反対に位置する仮面を何度も設計し、被り、また捨てる役者になることです。即ち「役を通じてはじめて存在しうる俳優—真の俳優—」です(全集第24巻382ページ下段)。安部公房の別の言葉を使へば「純粋な」俳優です。ナチスの制服をアメリカ軍の制服と比

較をして、前者を「純粹制服」と呼んだ安部公房であつて見れば、そこには日常的な実用をすつかりと離れた美すらあるでせう（エッセイ『ミリタリー・ルック』（1968年）全集第22巻129ページ下段）。アメリカ軍の制服を安部公房は「いかにも「近代国家」の偽善性にふさわしい、仮面の軍服」と呼んでゐる（同巻129ページ下段）。これがそのまま、演技・ニュートラル仮面論を通じて見る近代国家・大衆 対 純粹仮面の対決図といふことになります。勿論、何でも反国家、反大衆を唱へば良いと考へる役者は二流の役者、三流の（自称）藝術家です。（さういふ陳腐で通俗的な自称他称藝術家をネット・メディアとマス・メディアにうんざりする程の数を見る。）何故なら、それによつて自分自身が大衆になるからです。私たちは、此処で、安部公房の存在の師が何故石川淳であるのかを思ふべきです。以上のやうな意義に於いて、「役づくりとは要するに仮面づくりの作業なのだ。」このやうな意義に於いて、

「仮面はいわば、俳優と、役と、観客の三者が交差する、三差路なのだ。ただ仮面だけが、現実としてそこに存在しているのである。」

ここで、再度論題は冒頭の問い「いざ台本を手にした具体的な稽古の段階に入ると、かなりの俳優たちが、ニュートラルの練習にかぎって、不思議に拒絶反応を示しはじめた」のは何故かといふ問いを問ふて安部公房は自ら次のやうに回答する。この回答は次の二つの、役者自身に起因する誤解に関する解説からなつてゐるといふのが作者の答へです。

- (1) 仮面に対する誤解
- (2) ニュートラルの意味についての誤解

(1) については、「仮面が仮面であるためには、その背後に仮面をかぶっている俳優が存在してくれなければならない。」といふ此の「存在」はカッコを取り払つて「轉身」の完成した後の地の文に書くことのできるやうになつた存在ですが、初期安部公房が独自の存在論の記号《》を使つて《存在》と表記して表した、これは存在の意味です。即ち、俳優は仮面によつて三差路に《存在》する。《存在》すれば、「仮面は俳優を解放する。それは一種のパスポートだ。仮面からはみ出さないかぎり、あらゆるモラルから自由であるばかりでなく、空間をねじ曲げたり、時間を逆行したりすることさえ許されるのだ。」「仮面が仮面であるためには、その背後に仮面をかぶっている俳優が存在してくれなければならない。仮面という翼を得て飛翔する〔引用者註：勿論此の飛翔点は三差路である〕俳優の肉体が存在しなければならない。」この肉体を日常の時間の中で普通に実現するための稽古「以前」の稽古がアドリブ練習といふわけです。『他人の顔』では存在論の記号《》を使つて《顔》と表記してゐるので、ここでも上の引用の仮面を《仮面》として《存在》との関係を考へれば上掲の「主観・客観等価交換表」を得、またここで述べられてゐることが、安部公房独自の存在論の話であることが、読者に容易に知られるのです。

(2) のニュートラルについては、「ニュートラルは決してその仮面と矛盾するものではないはずだ。何度も繰り返したように、役（もしくは状況）を心理的に把えず、生理的に理解するのがニュートラルの目的だったのである。」心理的演技は「気持芝居」と呼ばれて敬遠されるべき新劇の「型芝居」です。「役づくりに際して、心理はしよせん求心的に作用してしまうのだ。ニュートラルな状態は、その心理の求心力から自己を脱け出させる手段でもある。ニュートラルになった肉体は、けっして仮面にさからったりはしないはずなのだ。」俳優にとって「役はいつもそそり立つ手に負えない岩壁であるはずだ。彼は目くらむ思いで、役に挑戦しはじめる。役に辿り着くために、いちばん適した仮面の製作にとりかかる。」と、ここまで引用を重ねてみると、やはりこれはこのまま小説『他人の顔』の主人公に対する安部公房といふ作者の期待である。

「次の課題として、実際の仮面をつけ、その仮面によるニュートラルの練習をためしてみたいと考えている。」と最後段落の冒頭にあるので、実際に安部公房はこれを試したのでありませう。ここから先は私如き文字人間の筆の及ぶところではない。やはり安部公房スタジオでニュートラルといふ概念を心理から生理的な感覚に落とし込んだ経験を有するスタジオの俳優たちに安部公房の指示の言葉なり、助言の言葉なりを、また何とか練習の経緯なりとも、文字で記録に残して置いてもらふほかはありません。

この肉体の生理的練習が如何なるものであつたかは、「周辺飛行21」の次の置かれた『安部公房 宇佐見宣一による談話記事』に報告されてゐる（全集第24巻384ページ）。この聞き手もなかなかいい質問を発してゐて、短いながら此の練習の当時の様子と安部公房の超越論的稽古論がよく解る談話記事になつてゐます。

『他人の顔』論

AS TRANSTEXTUALIDADES NA OBRA

O ROSTO DE UM OUTRO DE ABE KÔBÔ, COMO O DISCURSO DO MONSTRO

間テキスト性におけるモンスター・スピーチとしての「他人の顔」

[原文はポルトガル語]

Jovanca Ichikawa

翻訳：岩田英哉

【レジュメ】 原文は論考者自身による日本語

間テキスト性におけるモンスター・スピーチとしての「他人の顔」

安部公房の作品『他人の顔』（1964）での彼の顔の喪失は、顔のない男と彼が属していた環境とのつながりを破壊し、変形した。物語の主な要素としての顔は、安部公房の幾つかの作品で見ることができます。これらの相関関係は、作品、読者、世界中のさまざまな文化の間の対話を可能にするものです。このレジュメで引用して使用している用語「間テキスト性」は、他のテキストとの明示的または黙示的關係にあるすべての用語を用語として定義しているジェラード・ジュネット（1930-2018）の研究に基づいています。異なるテキスト同士の融合ということです。

分析して行くと、この作品は、人間の死刑執行人および救世主としての二つの顔を明確にします。安部公房（1924-1993）は、読者にアイデンティティの存在に疑問を投げかけます。作品で説明されている非現実性は、たとえ作者が意図的でなくても、他の物語との幾つかのつながりを可能にするように織り込まれています。読者は、『フランケンシュタイン』（1818）『透明人間』（1897）『オペラ座の怪人』（1909）『セネシオ』（1922）『セコンド』（1963）『顔のない眼』（1960）などの作品間の可能な繋がりを見ることができます。

ジェラード・ジュネット（1930-2018）の著作『パリンプセスト』（『書かれた文字に上書きされた写本』（1982）は、異なるテキスト相互の関係を説明するために5つのタイプの「間テキスト性」という用語を生み出しました。これらの概念は、『他人の顔』（1964）という作品を論ずるに当たって、これら間テキスト性を生み出すために使用されています。従って、他のテキストから作成されたそのモンスター・スピーチを正当化することは、テキストというものがそのテキスト自体を超越しているというジェラード・ジュネットの主張（2010）を証明するものです。

安部公房の小説に限らず、幾つかの物語では、人相の問題は、主人公という存在を幻滅に導く要素として提示されており、顔は他者を見るときに人間の関係性の真実を明らかにする照射単位（ハイライトユニット）であるため、安部公房（1924-1993）を読むとき、他のいくつかの作品でもモンスター・スピーチ（「怪物の言説」）と呼ばれる言説が構築さ

れることを分析すると、『他人の顔』（1964）という作品で構築されている間テキスト性が特定されます。『フランケンシュタイン』（1818）『透明人間』（1897）『オペラ座の怪人』（1909）は、顔のない男が自分を認識し、そして怪物になった顔を表していることがわかります。顔だけでなく、主人公の生きている状態についていえば、『能楽』や『オペラ座の怪人』（1909）の場合の仮面は結局元の仮面以前の状態に戻りましたが、『透明人間』（1897）が使用した包帯は、仮面を製作する前に彼が生きていた状況を表す結果に最後はなっています。『醜いアヒルの子』（1944）の物語は、主人公が経験していたことの複雑で深遠な何かを一層強く反映しています。『源氏物語』（11世紀）は、人間の演技をする劇（ドラマ）というものに関して日本文化の有する最古の面についての理解と批評を強く求めている作品です。セネシオ（1922）やパブロ・ピカソ（1881-1973）の八面体のような芸術作品は、顔の脱構築、彼が何になったかを意味する肖像でした。他方、映画『セコンド』（1963）」と『顔のない眼』（1960）」は、安部公房の作品群（1924-1993）より以前の作品であることに加えて、この論考のテーマのために分析対象の作品に加えられています。『他人の顔』の主人公である化学者は、『フランケンシュタイン』の怪物が感じた孤独と差別について語り、人間の目に見えない行動の変化を暗示し、役者が舞台上立って演ずるドラマ（劇）のことを口にするると仮面の使用を再開し、「醜いアヒルの子」の「死」を批判するのです。

属されない気分になるから、モンスター Becoming が生まれるのです。ここで使われるこのBecoming「生成」という用語は、哲学の用語です。紀元前6世紀に哲学者エフェソスのヘラクレイトスによってつくられ、現代ではドゥルーズとガタリによって使用されたものです。

本来物語構成の一部であったすべての明示的な間テキスト性は、顔のない男がこれらの登場人物たちと比較をすれば、モンスターBecomingを明らかにしたという考えにあります。引用、批評、分析、登場人物の性格によるそのような物語との比較を通して、『他人の顔』においても、主人公の顔のない男がモンスター・スピーチを生成することが証明されました。これは主人公の態度を正当化するアリバイになっています。これらモンスター・スピーチのスレッドは、モンスター・ルートと呼ばれるものを形成します。

従って、『他人の顔』（1964）の化学者の性格は、幻滅に苦しみ、自分のアイデンティティを求める人々の代表として立ち現れるのです。この作品のテーマは、他の様々な国での幾つかの物語に共通しており、モンスター・スピーチがモンスターになることの啓示として読者に知られ自覚されるのは、様々な異言語作品間に存在するこの関係からであって、その関係は明示的であり、また時には黙示的です。この論考では、モンスター・スピーチという用語と概念は、他の主人公たちとの比較をして主人公の態度を正当するためにも使用されていますが、これに加えて、モンスター・スピーチは主人公が感じ苦しんだことを表現する方法であるということも、この論考では明らかにしました。

【寄稿本文：日本語訳】

間テキスト性におけるモンスター・スピーチとしての「他人の顔」

翻訳：岩田英哉

安部公房の作品『他人の顔』（1964）での彼の顔の喪失は、顔のない男と彼が属していた環境とのつながりを破壊し、変形した。物語の主な要素としての顔は、安部公房の幾つかの作品で見ることができます。これらの相関関係は、作品、読者、世界中のさまざまな文化の間の対話を可能にするものです。このレジュメで引用して使用している用語「間テキスト性」は、他のテキストとの明示的または黙示的関係にあるすべての用語を用語として定義しているジェラード・ジュネット（1930-2018）の研究に基づいています。異なるテキスト同士の融合ということです。

分析して行くと、この作品は、人間の死刑執行人および救世主としての二つの顔を明確にします。安部公房（1924-1993）は、読者にアイデンティティの存在に疑問を投げかけます。作品で説明されている非現実性は、たとえ作者が意図的でなくとも、他の物語との幾つかのつながりを可能にするように織り込まれています。読者は、『フランケンシュタイン』（1818）『透明人間』（1897）『オペラ座の怪人』（1909）『セネシオ』（1922）『セコンド』（1963）『顔のない眼』（1960）などの作品間の可能な繋がりを見ることができます。

ジェラード・ジュネット（1930-2018）の著作『パリンプセスト』（1982）は、異なるテキスト相互の関係を説明するために5つのタイプの「間テキスト性」という用語を生み出しました。これらの概念は、『他人の顔』（1964）という作品を論ずるに当たって、これら間テキスト性を生み出すために使用されています。従って、他のテキストから作成されたそのモンスター・スピーチを正当化することは、テキストというものがそのテキスト自体を超越しているというジェラード・ジュネットの主張（2010）を証明するものです。

安部公房の小説に限らず、幾つかの物語では、人相の問題は、主人公という存在を幻滅に導く要素として提示されており、顔は他者を見るときに人間の関係性の真実を明らかにする照射単位（ハイライトユニット）であるため、安部公房（1924-1993）を読むとき、他のいくつかの作品でもモンスター・スピーチ（「怪物の言説」）と呼ばれる言説が構築されることを分析すると、『他人の顔』（1964）という作品で構築されている間テキスト性が特定されます。『フランケンシュタイン』（1818）『透明人間』（1897）『オペラ座の怪人』（1909）は、顔のない男が自分を認識し、そして怪物になった顔を表していることがわかります。顔だけでなく、主人公の生きている状態についていえば、『能楽』や

『オペラ座の怪人』（1909）の場合の仮面は結局元の仮面以前の状態に戻りましたが、『透明人間』（1897）が使用した包帯は、仮面を製作する前に彼が生きていた状況を表す結果に最後はなっています。『醜いアヒルの子』（1944）の物語は、主人公が経験していたことの複雑で深遠な何かを一層強く反映しています。『源氏物語』（11世紀）は、人間の演技をする劇（ドラマ）というものに関して日本文化の有する最古の面についての理解と批評を強く求めている作品です。セネシオ（1922）やパブロ・ピカソ（1881-1973）の八面体のような芸術作品は、顔の脱構築、彼が何になったかを意味する肖像でした。他方、映画『セコンド』（1963）」と『顔のない眼』（1960）」は、安部公房の作品群（1924-1993）より以前の作品であることに加えて、この論考のテーマのために分析対象の作品に加えられています。『他人の顔』の主人公である化学者は、『フランケンシュタイン』の怪物が感じた孤独と差別について語り、人間の目に見えない行動の変化を暗示し、役者が舞台上に立って演ずるドラマ（劇）のことを口にするると仮面の使用を再開し、「醜いアヒルの子」の「死」を批判するのです。

属されない気分になるから、「Monster-Becoming」（Monsterの生成）が生まれるのです。ここで使われるこのBecoming「生成」という用語は、哲学の用語です。紀元前6世紀に哲学者エフェソスのヘラクレイトスによってつくられ、現代ではドゥルーズとガタリによって使用されたものです。

本来物語構成の一部であったすべての明示的な間テクスト性は、顔のない男をこれらの登場人物たちと比較をすれば、「Monsterの生成」が明らかにしたという考えにあります。引用、批評、分析、登場人物の性格によるそのような物語との比較を通して、『他人の顔』においても、主人公の顔のない男がMonster・スピーチを生成することが証明されました。これは主人公の態度を正当化するアリバイになっています。これらMonster・スピーチのスレッドは、Monster・ルート（またはMonster・パス）と呼ばれるものを形成します。

従って、『他人の顔』（1964）の化学者の性格は、幻滅に苦しみ、自分のアイデンティティを求める人々の代表として立ち現れるのです。この作品のテーマは、他の様々な国での幾つかの物語に共通しており、Monster・スピーチがMonsterになることの啓示として読者に知られ自覚されるのは、様々な異言語作品間に存在するこの関係からであって、その関係は明示的であり、また時には黙示的です。この論考では、Monster・スピーチという用語と概念は、他の主人公たちとの比較をして主人公の態度を正当するためにも使用されていますが、これに加えて、Monster・スピーチは主人公が感じ苦しんだことを表現する方法であるということも、この論考では明らかにしました。それ故に、顔といふ要素を参照する間テクスト性を論ずる意義があるのです。

【寄稿本文：ポルトガル語】 by Jovanca Ichikawa

AS TRANSTEXTUALIDADES NA OBRA *O ROSTO DE UM OUTRO* DE ABE KÔBÔ, COMO O DISCURSO DO MONSTRO

Na obra *O rosto de um outro* (2015) / [1964] de Abe Kôbô a perda do rosto quebrou o elo do homem sem rosto com o ambiente o qual ele pertencia, seja no privado ou público, seus relacionamentos haviam sido atingidos por sua condição de deformado. O rosto como sendo elemento principal de uma narrativa pode ser visto em diversas obras, são essas correlações que permitem o diálogo entre obras, leitores e diversas culturas pelo mundo, uma vez que estas transtextualidades cruzam oceanos. O termo transtextualidades utilizado na pesquisa da qual esse resumo foi extraído, foi baseado nos estudos de Gerárd Genette (1930-2018) que define o termo como tudo aquilo que se coloca em relação explícita ou secreta com outros textos. Uma fusão textual.

A obra em análise articula o rosto como algoz e salvador do homem. Abe Kôbô (1924-1993) leva os leitores ao questionamento sobre a existência de uma verdadeira identidade. A surrealidade descrita na obra é tecida de forma a possibilitar várias conexões com outras narrativas, mesmo que não intencional pelo autor. Leitores podem perceber as eventuais ligações existentes entre obras como *Frankenstein ou o prometeu moderno* (1818), *O homem invisível* (1897), *O fantasma da ópera* (1909), *Senecio* (1922), *O segundo rosto* (1963), *Les yeux sans visage* (1960).

Gerárd Genette (1930-2018) em sua obra *Palimpsestos: a literatura de segunda mão* (2010) / [1982] cunhou o termo transtextualidade para explicar os cinco tipos de relações transtextuais, são elas: intertextualidade restrita, paratextualidade, arquitextualidade, metatextualidade e hipertextualidade. Foram utilizados estes conceitos para materializar essas transtextualidades na obra *O rosto de um outro* (1964). Justificando assim, o discurso do monstro criado a partir de outros textos, que corrobora com Genette (2010) de que os textos transcendem.

Em diversas narrativas a questão da fisionomia é apresentada como elemento que leva o ser à uma sensação de despertencimento, e o rosto é a unidade destaque quando se olha para o outro, por isso ao ler Abe Kôbô (1924-1993), lê-se também diversas outras obras.

As transtextualidades identificadas na obra *O rosto de um outro* (1964) quando colocadas em análise constroem o que se chamou de o discurso do monstro. Percebe-se que os rostos em *Frankenstein ou o prometeu moderno* (1818), *O homem invisível* (1897), *O fantasma da ópera* (1909), representam aquilo em que o homem sem rosto se reconhecia, o devir monstro. Não somente o rosto, mas também as máscaras como a do Teatro *Nô* e a do *O fantasma da ópera* (1909), retomavam sua condição. Sem esquecer das bandagens utilizadas pelo *O homem invisível* (1897) que representavam a conjuntura na qual vivia antes da construção da máscara. A narrativa de *O patinho feio* (1944) reforça seu complexo e profunda reflexão daquilo que ele vinha vivendo. Já Genji Monogatari (século XI) juntamente com o Teatro *Nô* demonstram a acentuada busca por entendimento e crítica aos aspectos mais antigos na cultura japonesa. As obras de arte como *Senecio* (1922) e os rostos octaédricos de Pablo Picasso (1881-1973), significavam sua desconstrução facial, o retrato daquilo que se tornara. Já as alusões aos filmes *O segundo rosto* (1963) e *Les yeux sans visage* (1960) assomam à obra em análise devido à temática, além de que são obras anteriores ao livro de Abe (1924-1993). O químico fala da solidão e discriminação sentida pela criatura em *Frankenstein*, alude a alteração de comportamento do homem invisível, retoma o uso das máscaras quando menciona o teatro *Nô*, além de criticar a “morte” do patinho feio.

O devir monstro surge desse despertencimento, o de não se sentir bem onde e com o outro, o termo devir aqui utilizado vem do conceito ontológico de “se tornar”, este cunhado a partir do filósofo Heráclito de Éfeso no século VI a.C e trabalhado por Deleuze e Guattari.

Todas as transtextualidades explícitas que fizeram parte da construção narrativa, figuram-se na ideia de que o homem sem rosto se comparava à estas personagens, que o leva revelar o devir monstro. Através das citações, críticas, análises e estabelecimento de comparação com tais narrativas feitas pela personagem, comprova-se que o homem sem rosto criou um discurso do monstro, este como álibi, justificativa para suas atitudes. Estes encadeamentos formam o que se denominou o percurso do monstro.

Portanto, a personagem do químico de *O rosto de um outro* (2015) / [1964] surge como a representação daqueles que sofrem pelo despertencimento e que buscam sua identidade. O tema é recorrente e comum à várias narrativas em diversos países, e foi a partir desta relação ora explícita ora implícita entre várias obras que se percebeu o discurso do monstro como a revelação do devir monstro. O discurso do monstro surgiu aparentemente como forma de expressar aquilo que sentia e sofria, além de ser usado também como justificativa para suas atitudes e comparação para seus julgamentos.

Dessa forma, as transtextualidades em referência ao elemento rosto que permearam a construção da obra caracterizaram-se em indícios do surgimento desse devir monstro. As críticas, notas, citações e referências utilizadas pela personagem em seus manuscritos compuseram o discurso do monstro permitindo o reconhecimento de um percurso do monstro que o levou ao devir.

安部公房の愛読者のことを何と呼ぶか

岩田英哉

この問いを立てるのは、これが実は最初ではありません。これまで胸中に幾度か問ふてみた結論を述べて、読者の信を問ふものです。問ふものすといふのは勿論修辭でありまして、特段のご回答はご無用、各自が自分の読者としての位置を確認する一助となればと思ひます。

シャーロック・ホームズにはシャーロッキアンやシャーロッキアーナが [註]、ルイス・キャロルにはキャロリアンがあるとすれば、安部公房には何と呼ばれる読者がゐるものか？といふのが問いであります。

個別の言語を問はず、英語もできる筈のドイツの編集者にも、といふことはドイツ語としてもおかしくはないかといふ趣旨の照会をしてあれこれと思案をすれば、私が読者より直接聞いたものも含めて順不同に列挙してみると、大体次のやうな安部公房愛読者がゐるものと思ひはれる。

- 1。Kobian
- 2。Kobist
- 3。Kobee or Kobey
- 4。Abe Junkey
- 5。Kobianer
- 6。Abemania

安部公房が-istであることはなかつたのである以上、2のKobistはないも同然と考へると、残りのうちのどれもこれも、固定の呼称一つに絞ることなく、読者一人一人が好きなやうに自称他称して使へば良いのではないかと思ふが、あなたは如何か。この相対化こそ安部公房の読者に相応しい。

私の感じでは、読者の中にはAbemaniaといふべき読者もゐるし、Abe Junkeyを自称する読者もゐるし、またもしシャーロッキアーナといふ呼称がシャーロック・ホームズの世界で学究的・学術的な肌合ひの愛読者を指すといふのであれば、洋の東西を問はぬ学術の世界の愛読者は皆Kobianerに入るといふことにならう。この呼び名の語感は、実はドイツ語としても通用するので、私は個人的には気に入つてゐるのですが、しかし私の読者としての位置はKobeeといふところでせう。

Kobeeの語末Beeは勿論、蜜蜂のbeeに掛け言葉で、これは如何にも安部公房の読者の形象（イメージ）らしく思はれる。といふのも、とにかく安部公房が好きで好きで堪らないので、安部公房の世界の蜜を吸って生きてゐるといふ、まあ、あなたのことです。三人寄れば文殊の知恵といふいひ方を借りれば、Kobees 三匹よれば 蜜の味といふところですが、さて、この名前、これもあなたには如何か。Kobees たつた一人でこそ 蜜の味 といふのが読者の姿かも知れません。

中には、少しでも自分のもつ安部公房のイメージを傷つけられると感じたら、たとへ同じ安部公房の読者であつてもそんな奴は拒絶するといふ愛読者もゐて、それならかういふ読者はやはりKobistと呼ぶにふさはしいと思ふのである。

このやうに考へてみると、大方の読者は安部公房マニアであると言へるのでAbemaniaであるか、またKobeesであるか、いや俺は私はKobistなりといふか、それぞれに趣があるやうである。Kobian、Kobinaerは、日本語としては余りピンと来ないのだらうか。

ここは読者の、否、安部公房の愛読者は皆安部公房有識者にて、安部識者に結論はお任せしたい。

[註]

『シャーロック・ホームズ講座 第5回 シャーロックアンの歴史と活動』（『ハヤカワ ミステリーマガジン』（2019年7月号。通算735号。87ページ）によればつぎのやうな記述がある：

「シャーロックアナーナは、文学的活動、論文や会議での発表などに対してよく使います（ホームズ学という単語も使われていますが、必ずしも学問としてホームズを扱っていると言えるかは疑問ですね）。その研究対象となるのは、ホームズ物語六十篇に登場するすべてのキャラクターの人生、行動、生活などについてです。ホームズを実在の人物とみなしているという、遊びの視点があるわけです。」

Mole Hole Letter

(46)

鯨と雁

岩田英哉

鯨はいふまでもなく、安部公房の「死に急ぐ鯨たち」の鯨であり、雁は、これは馴染みがないかもしれませんが、福沢諭吉の雁である。これは、安部公房の鯨と福沢諭吉の雁といふ対比です。雁はカリと読んでもガンと読んでも結構です。

安部公房の、読者にいふまでもなく周知のエッセイ『死に急ぐ鯨たち』（1984年）は次のやうに始まつてゐる（全集第27巻、185ページ）。1984年とは、思へば、日本の経済は俗にいふバブルの真っ最中であることを念頭に置いて読まれたい。そして、SFの読者と重複してゐる安部公房の読者には馴染み深いと思はれるジョージ・オーウェルの未来デストピア小説『1984』の標題の年でもあります。この年の前後に、特に翌年の1985年に政治・経済・文化の領域で何が起きたかは必要に応じて言及するかも知れませんが、やはり日本の国と日本人が今に至るまでの転落の始まりの年の前年に（あへて言ひたい）預言のやうに（予言ではない）安部公房は次のやうに此の文章を書きはじめてゐる。天才は詩人に等しい預言者です。いや、大江健三郎がねりさんに言つた通りに、安部公房は生涯詩人でしたね。

「ぼくの職場は噴火で出来た湖をとりまく外輪山にある。近い将来に大地震を予告されている筆頭候補地の駿河湾から六十キロほどの距離だ。専門家の意見によれば、明日にでも地震が起きて不思議はない状況らしい。兆候がありしだい警報が発令されることになっている。常時、危険な次の瞬間と鼻を突き合わせているわけだ。もっとも集団移住の動きについてはまだ耳にしたことがない。

二つの時間が平行して流れているようだ。一つはプレート圧力で限界まで蓄積されたエネルギーが解放を待つ、物理的な時間。いま一つは昨日のように今日があったのだから、今日のように明日があるはずだと言う、日常的な経験則の時間。物理的な時間が避けがたいことを知りながら、なぜか経験則を優先させてしまっている。」

この仕事は芦ノ湖を囲む山の上であり、安部公房らしいことにあの美しい富士山は見えないといふ絶好の位置にあります。ここでいはれてゐることは、

(1) 結果：地殻変動（大地震）

(2) 原因：

(a) 物理的時間の中での構造的な地殻変動【地殻変動】

(b) 日常的な一次元の時間の中の直線的な経験則による地殻無変動【経験則による無変動】

といふ風に整理をしてみると、安部公房の此の短いエッセイの主題はよくわかります。そして、この主題を現在の私たちに応用して見ると、今私たちが時代は揺れてゐる、それも大地震であると隠喩（メタファー）で表すことができると感じてゐたら、それは典型的な流行の事象の一つを例に取れば、次のやうになります。

(1) 結果：武漢発の新型コロナウイルスの世界的蔓延

(2) 原因：

(a) 【地殻変動】

(b) 【経験則による無変動】

さて、このやうに簡略に整理をした上で、このエッセイの最後は次の文章で終はつてゐるのは、これもコンピュータ登場黎明期の傑作SF『第四間氷期』（1958年）の読者にはご存知の通り。今はこれから5Gといふ通信規格の登場の直前期といふことであれば時代は62年、干支が12回巡つて還暦を迎へて問題は依然として変はらないと考へることができます。即ち、

「 鯨の集団自殺は謎めいている。かなり高い知能をもっているはずの鯨の群れが、とつぜん狂つたやうに岸をめがけて泳ぎだし、浅瀬に乗り上げ、座礁してしまうのだ。いくら追い返しても逆らうばかりで、そのまま空気に溺れて死んでしまう。何かにおびえて逃げようとしているのだろうか。鯨を恐がらせるものと言へば、海の猛獣といわれるシャチか鮫だろう。しかし鮫のいない海域でも見られる現象だし、シャチ自身が鯨の仲間、やはり集団自殺をくわだてるのだ。そこで、もしかすると溺死の恐怖におびえた鯨が海から逃れようとしているのかもしれない、と言う説さえあらわれた。海の生物が溺死を恐れるというのは逆説的で、考え方としてはたしかに面白い。鯨は魚ではなく、もともと肺で呼吸する地上の動物だったのだから、ことと次第によっては先祖返りして水による窒息死に恐怖心を抱きはじめないとも限らないわけだ。寄生虫か細菌に脳をおかされ、浮上する力が失われたとき、可能性としての溺死におびえるあまり、現実の死を見失うこともあるだろう。

人間だって鯨のような死に方をしないという保証はどこにもない。」

中国共産党発の武漢肺炎・新型コロナウイルスといふ最近の世界的な蔓延を近時の世相の一大事件と見れば、このエッセイの締め括りは誠に今の日本人の弱点といふ的に当たつてゐる。今のお笑ひ国会議事堂の中の議員たちや雲を霞の霞ヶ関の行政官僚に至るまで、権力中枢の日本人たちは皆、少ない例外を除いて、この細菌に、別に発症せずとも既に「脳をおかされ」て「現実の死を見失」つてゐると見えるからである。もちろん、この「現実の死」の最大のものとは国家の死であり、個人の死である。これから葬儀屋と火葬場と坊主は忙しくなつて商売繁盛であらうから、これら三者の統計的な売り上げの

数字か株価を日に週にと迫って行けば、国家の死がいつ来るかの予測、あるいは今の政権がいつ終はるかの予測ができるのではあるまいか。私は「死に急ぐ鯨たち」の話がしたいのである。死に急ぐ人間たちの実際の話、安部公房は次のように書いています（『シャーマンは祖国を歌うー儀式・言語・国家、そしてDNA』1985年。全集第28巻、229ページ）。もちろん安部公房ですから言語の話との関係で論ぜられる「死に急ぐ日本人たち」の話です。《ことば》を《日本語》と置き換えて読むと臨場感があるでせう。

「《ことば》自体は本来分化や分業化を得意としていたはずですが、いったん「全員集合」の号令をかけると、これもまた強力な信号として働きます。《ことば》を手に入れるために支払った数々の代償のなかに、「集団化」の本能だけは入っていなかったのかもしれない。しばらく前、「集団化」の例として面白い事件がありました。東北で起きたホテル火災の一件です。火災現場を詳細に調査した結果、階段の下で焼死したいちばん多人数のグループについて、奇妙な事実が判明したのです。どうやら二階から逃げてきた客が、いったんはそこで避難行動を中止したらしい。生存者の話で分かったのですが、そこで客の一人が忘れ物を取りに二階に駆け戻ったのが行動中止のきっかけだったという。そしてそのままほぼ全員が火にまかれてしまった。どうもこの力場の主役はその血迷った忘れ物の主だったようです。群集心理として、パニックの際には、例外行動をとった者がボスとして選ばれる傾向があるらしい。もし例外者がそれだけでボスの資格をもつとすれば、ボス形成のメカニズムはボス候補の資格とは無関係に、集団に潜在する属性なのかもしれません。《ことば》の下にひそんでいる「集団化」の衝動は、あっさり《ことば》のフィルターの目を詰まらせてしまうほど強力なのかもしれない。しばしばアジテーターが熱弁をふるうとき、異形の者として自分をきわ立たせる理由も分かるような気がします。シャーマンをみくびってはいけない。シャーマンの歌に対する反応は、誰の心にもひそんでいる郷愁にも似た衝動らしい。」

これらのことを安部公房はまた別の文脈で次のように3つにまとめています。これが安部公房といふ言語芸術家の目に映った当時の1980年代の世相であるといふことで、これは今も的確な21世紀の現代の鋭い批評になつています。安部公房は現代の世相、即ち流行を実際には簡単・簡潔に次の三つのキーワードで表現してゐる。

- (1) シミュレーション
- (2) 記号の混同
- (3) トーチカ願望

これを、安部公房の『方舟さくら丸』（1984年）に拠つて20世紀の後半から21世紀の今に至るまでの文化と文明に関する特徴を少しく敷衍すると、次のやうになります（『哲学の問題101（8）：寛容』（もぐら通信第91号）の「4. 安部公房の拳

げた現代の3つの特徴」)。 () の中の言葉は私による短い解説です。 :

- (1) シミュレーションゲーム(現実と仮想現実の混同)
- (2) 現実と仮想現実の関係に存在する記号の混同 (実は、言葉の意味を考へぬ無知・無能)
- (3) 閉所・トーチカ願望 (他人攻撃願望: 排除型・クルクルパー論理の (無根拠による) 外部否定・排除型の理屈) 」

これらを再度まとめると、危機的な状況に於ける盲目的な集団化心理に基づく狂気の一斉行動は、これら三つのことが原因で起こり、また同時にこれら三つが結果となつて因果の連鎖を連鎖させて行くといふことを、安部公房は言つてゐることになります。

お笑ひ国会議事堂の議事とすら呼べぬ低劣なるお喋りは、

- (1) シミュレーションゲーム
自分が国会議員であるといふ自覚も責任感も、これに基礎を置いた現実感覚もない人間 (私は猿と呼んでゐることは読者ご存知の通り) の感覚をいひ当ててゐて、この現実感覚のないゲームの仮想現実の妄想は現行日本国憲法第9条第2項にあること。しかし、シミュレーションと英語をカタカナ文字に変換して表記すると如何にも何か立派なことを言つてゐるやうに一般論としては見えるし聞こえるが、要するにやまとことばでいへば「ごっこ遊び」である。

これは確か共産主義・学生運動に忙しく学問を忘れた1960年代末期当時の子供達の暴力を指して、今は亡き江藤淳の名付けた呼び名であつたが、この言葉は今も生きてゐる。

1960年代末期には学生がごっこ遊びをしてゐたが、今や国会議事堂内でも「政治ごっこ」遊びが蔓延してゐて、これがまた疫病のごときものである。といふことは、私たち日本国民もまた「日本国民ごっこ」遊びをしてゐるのではないかとすると、この問題の解決策は一つであつて、現行日本国憲法などただ臭いだけの屁であると思ひ定めて、本来日本人の大好きである筈の「超法規的措置」ばかりを大いに発動すれば良い。といふのが解決策であり、かくなれば、怖いものは何一つないのである。もともと文学の世界がこれである。箱男の救済を定めた天下晴れての法律などあるわけがないではないか。箱男が路傍で小声で歌ふエレジー (哀歌) は自救自済の歌である。福田恒存流にいへば、99匹に対するに一匹の世界である。安部公房流にいへば、箱男。

- (2) 記号の混同
安部公房の読者としては笑ひ嗤ふ以外にはないが、『方舟さくら丸』のさくらは、あの

香具師の、詐欺師のサクラの桜である。この桜の花見の小額の代金の授受の話をどうも国会議事堂でお喋りしてゐるらしいと仄聞すると、今の国会議員はみなサクラではないかと伝統的・文化的な文脈で正解することができる。今の総理大臣までもが野党のサクラ議員のサクラ質問に真剣に答弁してゐるのだ。私が総理大臣ならば疫病予防の防護服を一着に及んで野党議員の答弁に立つだらう。と思へば、これは上記（1）のシミュレーションゲームの世界である。ところが、国民は誰が中国共産党のサクラであり、誰が北朝鮮のサクラであり、誰が大韓民国のサクラであるかは、ネット・メディアのお蔭で広く知ることができてゐる。ひょつとしたら、こんな国会議員を選挙しなければならぬといふ選挙制度とこれを保証した現行日本国憲法もサクラではないかと思はれるのである。この日本といふサクラを人寄せパンダに使つて商売する香具師の名前はなんといふのか？と問へば、政治・経済・文化・歴史の専門家には答へは出てゐるのではないか？

これは、誰が論じても良い日本国サクラ論となるだらう。私は隠喩（メタファー）を使つて事を表さうとしてゐるだけで、これが実際には何といふ名前と呼ばれるものかにはまでは立ち入らない。政治と経済は私の領分ではない。しかし、私のやうな素人が隠喩を用ひてかく皮肉をいひたくなるほどに、文化はもちろん、今の政治も経済も酷い惨状であるといふことです。かうして見ると、記号の混同とは「ごっこ遊び」でもあることがわかる。

（3）トーチカ願望

これは常に自分が戦場にあるか、あるとおもつてゐる状態にあつて、勝手に（即ち私的に引いた）境界線を公共のものと主張するためには論理などどこへやら、上は憲法から下はポリコレといふ共産主義の醜い亜種に至るまでを総動員して、しかも基準は単に自分のその場その場の好き嫌いだけである理由を隠して、他者・他人を攻撃する願望のことである。と、私がかく何でも定義になつてしまふが、要するにかういふことです。この屁理屈を私はクルパー論理学と呼んでゐる。屁理屈ではなく、本当は糞理屈と呼びたい。このトーチカ願望を古典的な慣用句でいへば、見猿・聞か猿・言は猿といはれてゐる。しかし、此の古典的用法は消極的な態度であるのに対して、トーチカ願望は徒党を組んで見せ猿・聞かせ猿・言はせ猿に進化してゐて、他者を積極的に攻撃する新種のウイルスになつてゐるのだ。

しかし、さすが安部公房の分類である。この三題嚆で世相を、即ち「死に急ぐ鯨たち」を論ずること今も新鮮であるとは。

さて、この鯨の隠喩（メタファー）を重ねて、福沢諭吉の秀抜なる隠喩である雁にご登場願はう。これも少し引用が長いかも知れないが、ご勘弁、読むに値する明治の人間の言葉です。結局、これが古典の価値といふことなのだな。少しも古くない。あなたは、流

行の中で不易の言葉を口から脳味噌から吐いてゐるか？以て自戒とすべし。

明治の人は偉かつた、と思ふことが最近も何度かありましたが、この文章もまた、其の一つです。

「語に云く、学者は国の奴雁（ぬがん）なりと。奴雁とは群雁野に在て餌を啄（ついば）むとき、其内に必ず一羽は首を揚げて四方の様子を窺（うかが）ひ、不意の難に番をする者あり、之を奴雁と云ふ。学者も亦斯（かく）の如し。天下の人、夢中になりて、時勢と共に変遷する其中に、独り前後を顧み、今世の有様に注意して、以て後日の得失を論ずるものなり。故に学者の議論は現在其時に当ては効用少なく、多くは後日の利害に関するものなり。甘き今日に居て辛き後日の利害を云ふ時は、其議論必ず世人の耳に逆はざるを得ず。これがため、或は虚誕妄説の譏（そし）りを招くことあれども、其妄説なるものは唯、今世の耳に触れて妄説なるのみ。其耳と其説と孰（いつ）れが正しきや、今日を以て裁判す可きに非ず。」

（『福澤全集』第一九卷五一二～五頁〔註1〕）

〔註1〕

池尾和人著『連続講義・デフレと経済政策 アベノミクスの経済分析』の扉からの引用（孫引き）です。この著者の心が、奴雁といふ言葉の引用でよく判ります。

「学者は国の奴雁なり」といふ一行を読んで思ふのは、この元は漢籍にあつた奴雁といふ言葉の奴の文字の意味は、国に尽くして衆といふ群雁に嫌はれることを厭はぬ雁であるといふ意味です。孤雁としないのは、孤雁では群れを離れるからで、やはり群れの中にゐて首一つを、餌を食らふて天下太平にして飽食に群れなす衆の上に、出して敵の襲来に警告を発する役割の一羽が奴雁といふ意味だからです。

しかし、どうもいけない。「学者は国の奴雁なり」といふ一行を引き写しても、「学者は国の奴隷なり」といふ学者が表立つものには余りに多い。しかも其の国といふもの、即ち安部公房の言葉を借りていへば人類の歴史上人間の組織の最大のものである国家と云ふ組織、この組織の全体がよく理解できてゐない（自分の専門領域からも理解できてゐない）といふ体たらくで、そんな奴隷・奴婢の類を学者とは呼ばない。学者であれば、学問のある者でなければならない。今改めて学問の二文字を見れば、問ひを学ぶと訓ずることができるのであれば、やはり、学問とは横丁の長屋の熊公ハチ公と御隠居の問答に勝る学問はないのではあるまいか。さう、それに菟蓐問答。三角とは何か？四角とは何か？丸とは何か？である。あの雲水位に謙虚でありたいものである。トーチカ願望の塊には此の美德が欠落してゐるので菟蓐問答の役目は務まらない。また、トーチカ願望の塊なる人間はシミュレーション人間であつて、「ごっこ遊び」に遊ぶ「ごっこ」人間だと云ふことになります。即ち、我は奴雁なりといつて、実は煽動者であるといふ雁ならぬ癌である。このやうに言葉を隠喩として使つて見れば、隠喩といふ譬喩（ひ

ゆ)は誠に強烈なる譬喩である。今の世ならば、癌ではなく、コロナウイルスとか、私なら一層強烈に(政治の方面も含めて)チャイナチ・ウイルスといふが、あなたにおかれては、如何か。

実は、標題「鯨と雁」の副題は、目に見えぬ透明な、即ち安部公房と同じ汎神論的存在論のインクで「疫病・戦争・共産主義」といふ三題嚙の名前が書かれてゐるのです。

『銃・細菌・鉄』といふ文明史論の確かベストセラーがあつたが、結局私の三題嚙も同じです。銃は戦争、細菌は疫病、鉄は畑を耕すが、しかしまた同時に武器の素材。鉄を隠喩に使へば共産主義となり(この鉄器を使へば耕作が楽になつて良い世の中になるぞ!)、このイデオロギーの鉄器を凌駕するにはどんな素材の武器で対抗すべきかを私たちは考へてゐることになります。平凡な「学問」で、このエッセイを締めることにします。答の欄は、あなたが自分の言葉で書くのです。これが表現の自由、言論の自由です。即ち、問に対して自由に答へることができること、これが言論と表現の自由だといふことです。これはトーチカ願望でも「ごっこ遊び」でも「記号の混同」でもない。鯨も雁も記号ではありません。生きた命である。この問に答へることは、あなたが自分は記号ではないことを証明することです。

問：あなたは「死に急ぐ鯨」の一頭になるのか、それとも奴雁になるのか？

答：

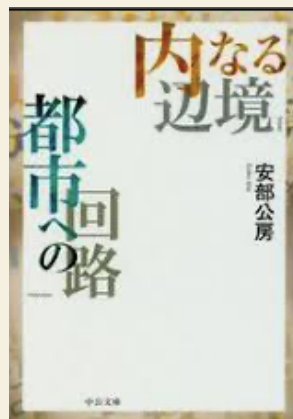
なんだこれは二者択一の間(selective question)ではないか。といつて、安部公房ならば超越論的に次のやうな答になる。

問：あなたは「死に急ぐ鯨」の一頭になるのか、それとも奴雁になるのか？

答：そんなのはどつちもお断りだね。僕はあの榎本武揚といふ人物に興味があつてね。つまり、幕府からは明治政府に寝返つた裏切り者と呼ばれ、明治政府からも江戸幕府の裏切り者と呼ばれたあの男さ。さういや歳のせいで思ひ出すが、高校時代に頭のいい奴はみなヘーゲルを熱心に勉強してゐて、そつちに行つたね。実に魅力的な人物だらう？ヘーゲルぢやないよ、榎本武揚のことだよ。君、さうは思はないか？まあ、幕末・明治の箱男だね。路傍といふ境界域を生きる「死に急がぬ鯨」であり、且つそんな死に急ぐ鯨たちの歌ふやうな「祖国を歌はぬシャーマン」のことさ。さあ、まあ、シャーマンはいつの時代でも殺される運命にあつたのではないかな？君、どう思ふ？あれ、榎本武揚は畳の上で死んだのだつけ？自分で書いた小説の結末をすっかり忘れてしまつたよ。それとも、やつぱり失踪したんだつたつけ？なんだか、また白鳥殺しの歌が聞こえて来さうぢやないか。殺される前に言つておくが、僕は日本語の作家だよ。ユダヤ人ではないからね[註1]。もちろん、それ故に、カフカはいつも、そして益々僕の水先案内人さ。

〔註1〕

白鳥殺しと文章・文体論の問題は『続・内なる境界』の最後のところに詳しい（全集第22巻、346ページ下段から347ページ）。ユダヤ人論は『内なる境界』（全集第22巻、205ページ）および『続・内なる境界』（全集第22巻、328ページから330ページ）に、後者は都市・農村論として、前者は（都市論を含みながら）国家を越境したユダヤ人論として詳しい。ともに今尚読むに値するユダヤ人論です。二つの正統「内なる境界」論と『都市への回路』を併せて中公文庫になつてゐる。装丁は、安部公房全集の装丁ご担当の近藤一也氏。いつもながら美しい装丁であり、表紙です。



蛇足ながら、チャイナチ・ウイルスに対する防疫は次の事項の徹底が大事です：

0. 人の集まる場所へは行かない
1. 栄養をとる
2. 睡眠をとる
3. ストレスを回避
4. 笑ひが大事（安部公房を読みませう）
5. 手を洗ふ
6. 体を暖かくする

これ皆免疫力を上げるためなり。

（「新型コロナウイルスに一番感染しやすい場所は？満員電車？病院？風俗？」による：

<https://www.youtube.com/watch?v=KQFVs-go1IU>）

以上の論述を一枚のマトリクスにすると次のやうになります。題名は長いものですが、短く云へば、「チャイナチ対安部公房分類の三題噺マトリクス」といふことになります。

言語精神病理学の創始者にして且つ無免許医師である私の見立てでは、今の米中戦争は此の戦争を核にした（二階層の）第三次世界大戦である。即ち、論理・物理二階層に及ぶ宗教・擬似宗教戦争、文明間戦争、近代ヨーロッパ文明・中華マルクス主義帝国戦争です。いよいよ20世紀の二つの世界戦争の総仕上げです。我は奴隷ならむや？

この表の戦争の裏では、各国歴史上帝国であつた近代国家は皆EXIT帝国になつて、同時に此の世界大戦からの離脱派にならむと欲してゐるといふ一見矛盾状態にあるといふことは既述の通りです [註2]。後で思ひ出しましたが、ペルシャ帝国（今のイラン）といふ高度な文明の名前を挙げてみませんでしたので追記します。このペルシャ帝国もEXITしようとしてゐる帝国です。さて、我が日本帝国や如何に？

[註2]

『Mole Hole Letter (21) : 二階層戦争論~時代と世界のための処方箋~ MADE IN JAPAN』 (もぐら通信第104号) および『Mole Hole Letter (30) : 第三次世界大戦とは何か~EXIT帝国対中華帝国の戦争~』 (もぐら通信第109号) をご覧下さい。

2020/02/16 岩田英哉	疫病・戦争・共産主義とシミュレーション・記号の混同・トーチカ願望 のマトリクス (今世界で何が起きてゐるか?)			
	疫病	戦争	共産主義	実例
シミュレーション (冷徹・冷厳なる 「ごっこ遊び」)	「バイオ・ハザード」 (仮想現実のゲームの 名前の象徴的普遍性)	論理層での通信・通信 開発	擬似宗教/カルト (机上 の空論妄信信仰)	米中戦争、共産主義、米中戦争を 中核とした第三次世界大戦
記号の混同 (生命の記号化)	遺伝子工学 (遺伝子の組み替え)	論理層での生物兵器の 使用	遺伝子工学	新型コロナウイルス
トーチカ願望 (情緒的・無根拠 排除論理)	強制隔離、強制収容 所、共産党・共産主義	物理層での物質的戦争	強制隔離、強制収容所	国家封鎖、都市封鎖、国際金融資 本の変遷
実例	新型コロナウイルス	米中戦争を中核とした 第三次世界大戦	中国共産党	中国共産党

(*) この種のマトリクスがあと二枚生まれれば、現下の世相 (世相ももはや国際世相の意味であるといふ其) の一覽性のあるマトリクスができます。キリスト教から生まれた此の共産主義といふ疫病は21世紀の前半で絶滅させたものである。しかし、人類の精神にその免疫性が十分にあるのか？

Topologyで日本の文化を解説する「内なる辺境」シリーズ

(7)

紐 (ひも)

岩田英哉

橋本麻里さんといふ方の『はじまりの紐』といふ題名の随筆がある。エッセイではなく、随筆といふ言葉の選択は、やはり題材といふ素材がロープではなく、紐といふ伝統的な素材だからです。しかし、この随筆の中身はアルファベットでessayと呼ばれるべき論理性を備へてゐて、即ち英語の原意の通りに一個の論文です。紐とはそれほど論理的に、緻密にできてゐる藝術だといふことを、次に紹介する紐は数学的に示してゐるのです。最初から、最後は東京スカイツリーのトラスで締めたい。即ち、紐組みまたは紐編みとトラスの話です。別途論じてゐる『縄文紀元論』によつて、トラスとは言の葉の片葉であり、木々万葉の片葉であり、勾玉の片方であり、秋津島大和国の円環を成して交尾する赤蜻蛉のトラスの姿である、といふと、組紐もまた同じ構造かと理解できることせう。然り。組紐も一筆書きの世界です。

「組紐の構造を文字の身で説明するのは至難の業だが、身近でより想像しやすい織物の場合、経糸 (たていと) 緯糸 (よこいと) のポジションは一定で、それぞれが直角に交差することで固定され、織り上げたものが平面的になると、たやすく理解できる。そして一本または数本の糸を、「結び」の連続によつて平面、あるいは円筒状の組織にしたものが「編む」紐となる。

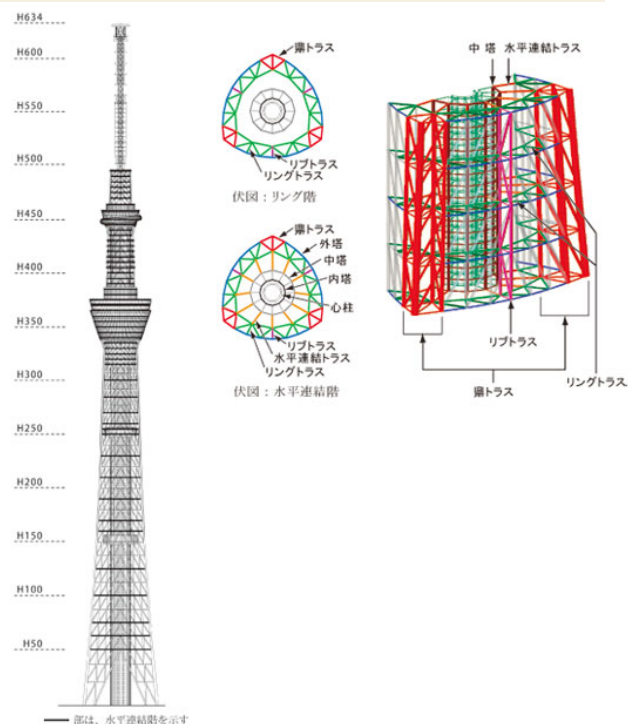
いっぽう組紐は、複数条の経糸が互いに斜めに交差することで、組織を形成していく。そのため伸縮しやすく、輪切りにして断面を見れば一目瞭然、立体物として構築されていることがわかる。まるで心柱を軸にトラス [引用者註：トラスに同じ] を連結した、東京スカイツリーの鉄骨を思わせる、

「組む」ことでしか実現できない、いっそ建築的と呼べるような三次元の構造を、組紐は備えているのだ。」 (『はじまりの紐』岩波書店『図書』2019/12月号/29ページ)

組紐のトラス



東京スカイツリーのトラス



上の引用では組紐と東京スカイツリーといふ塔との一致関係を述べてあるわけですが、この組紐の専門家が何も意識せずに当たり前述べてあるやうに、トポロジーといふ数学は素材を問ひません。その形態・形象だけを問題にして、その一筆書き性（といふのは私の造語ですが）を問題にします。即ちその形態・形象の連続性を問題にする論理です。これは数学といふ学問が論理的な学問だからトポロジーを数学と今呼んでみただけで、論理的にさうであれば学問分野を問ひません。言語学然り、哲学然り、論理学然り、生物学然りなのです。即ち、突然変異といふことを考へざるを得なくなるやうなダーウインの進化論、従ひ進化論の生まれた絶対精神などといふイデオロギーを生み出すやうなヘーゲルの哲学などの、一次元の直線的な時間でしか狭窄にものを見ることのできない論理とは無縁の論理です。前者がユークリッド幾何学ならば、後者は非ユークリッド幾何学の世界です。前者の世界では平行線は永遠に交差しないので祖型・唯一の先祖といふものを考へねば全体がまとまらないのに対して、後者は平行線は至るところで交差し得るし実際に交差するので、最初から全体がまとまりある世界であるといふ大きな違ひがあります。前者の論理は競争と不安、後者の論理は安心といふことです。

橋本さんは文中当然のことながら、この論理に従つて、技法視点での紐の分類をしています。今回説明をしてゐるのが、4つある紐の形態の内の「組む」紐、即ち組紐です。

紐の分類（技法視点）

- (1) 撚（よ）る
- (2) 編む
- (3) 織る
- (4) 紘（く）ける

(1) から (3) は読んで次の如く。(4) の紘（く）けるとは、「縫い目が表に出ないように縫う」紐の形態であり、この形態に依る形象または図柄といふことでになります。『縄文紀元論』との関係で組紐に関する重要な指摘は次の指摘です：

「ごく簡単な組紐の痕跡は、縄文土器の回転圧痕にも見出すことができ、古墳時代には刀やその鞘に付随する形で、断片的ながら組紐の実物が見つかっている。」

「縄文土器の回転圧痕」とは、縄文人は轆轤（ろくろ）を廻してゐたか、同じ効果を得るために土器そのものを回転させる工夫をして土器を製作したと、この組紐の専門家は言つてゐるといふことです。即ち、組紐は台を回転させながら紐を組むのであるか、あるひは逆に紐を廻して組むのでありませう。YouTube動画組紐の実際の組み方を知ることができます（38秒）：<https://www.youtube.com/watch?v=7RUIhsOWS30>



私の疑問は、縄文人が紐の結び目で、即ち縄のロープの結び目で距離を超え時間を超えて意思疎通をしないことがあつただらうか（インカ帝国の人々のやうに）？といふものです。これに加えて左優位・右劣位といふ高天原の規則から考へられる左巻優位・右巻劣位といふ渦巻のことはないものであらうか？と考へれば、確かに国生みをする時にイザナギ・イザナミのカミが婚姻のために右方向に廻ると水蛙子（ひるこ）が生まれ、左方向に廻ると島々が生まれるといふことにも示されてゐる。興味深い此の議論はここまでとして本題に戻ります。

仏教伝来以降の組紐の歴史を時代ごとに次のやうに説かれてゐますので箇条書きにして引用します。

（1）仏教の伝来以降

正倉院の御物と法隆寺所蔵：服飾用の帯、武具・馬具の紐、調度の紐、宗教用具の紐や芸能用具の紐として今日まで伝世してゐる。

（2）平安時代から鎌倉時代

組紐の文化、即ち「技術と意匠は爛熟を迎える。遺品として伝存するものは平安時代後期以降に限られるが、神護寺に伝わる一切経を包む経帙（きょうちつ）の紐、厳島神社に施入された平家納経を巻き止める紐、四天王寺に伝わる懸守（かけまもり）の紐、西大寺の釈迦如来立像の頭部に納入されたひも、そして御嶽神社に奉納された甲冑を威（おど）す紐など、目的と用途に応じた組み技法が案出され、時代が要請する美意識に叶った、典雅な色柄が表現された。

（この筆者は実に語彙が豊かだ。紐の結び、産霊の文化はそれだけ豊かな世界だといふことを意味してゐます。縄の文化も同様であつたことは間違ひないと私は確信します。）

(3) 室町時代以降近世

「室町時代は、公家が力を失い、戦いの形態が変化して甲冑が簡素化したことなどが重なって、組織の高度化や後に残る名品は実現しなかった。その代わりに、組紐の利用が公家・武家だけではなく、経済力をつけてきた庶民へも広がっていく。近世に入ると組紐の利用は一層拡大し、また用途も多様化する。それまで秘伝だった技法を記録する解説書が作られ、産地も増えていった。

(4) 江戸時代

江戸時代承応元年（1652年）創業の組紐製作・販売店、上野・池之端にある「有職組紐・道明」が此の技術を継承して今日に至る。今同社が販売してある組紐製品は「女性用の帯締めがほとんどだが、江戸時代に用いられていた組紐は、刀の柄（つか）に巻く柄糸、あるいは刀の下げ緒としての需要が大半で、基本的に男性、それも武士の装身具だった。」

(5) 明治以降

「ところが明治維新後、廃刀令で刀関連の需要がなくなったこと、帯締を使うタイプの帯結びが普及したことなどから、道明の取り扱いも帯締が主へと逆転」して、社業は今日に至る。記述されてある社史を見ると、歴代の社長はみな組紐の専門家業の他に、数学博士、一級建築士その他学究肌の経営者が多く、7代目の著した『ひも』（学生社、1963年）は「組紐の歴史をまとめた名著」であるといふ。

このessayの最後の段落は誠にトポロジーの本質を言ひ表してあるのでお読みください。これが日本文化の本質だと言つても良いのです。いや、トポロジーの「本質そつくり」を言ひ表してあると言つた方が良いかも知れない。縄文紀元1万6000年来の日本文化の本質、日本文明の位相を写した「本質そつくり」を思ひ出してもらひたい。

「表面的で、非本質的。従属的で、過剰。西洋近代がそのように定義して遠ざけた、装飾/かざりの力と意味を、この連載を通じて、コトとモノの間から見出していきたい。」

イスラム教文明を見ても、インド文明を見ても「装飾/かざりの力と意味」を有する文明はみな非常に高度な文化を多面多様な分野に於いてしかし同じ一つの原理で首尾一貫して徹底的に美的であるといふ性格を有してあります。日本文明もまたその一つです。この原理が何か、日本にあつては如何に位相幾何学的（topological）な原理に基づいてあるか、その美意識の根底にあるものは何かについては『縄文紀元論（4）』（もぐら通信第111号）に詳述しました。

最後にある執筆者の氏名・資格を見ると、橋本麻里さんは永青文庫の副館長ださうである。これだけの文章が書ければ此の重責も果たせやうといふものです。

ネット・メディア論 (6)

岩田英哉

目次

- 0. はじめに
- 1. 国家とは何か
- 2. 用語の定義
- 3. メディアとは何か
 - 3.1 マス・メディアとは何か (20世紀)
 - 3.1.1 世界観としてのマス・メディア (一神教のtopology)
 - 3.1.2 マス (mass) とは何か
 - 3.1.3 マスとプロパガンダ
 - 3.1.4 マス・メディアとプロパガンダ
 - 3.1.5 1945年までの日本国家と1945年以後の日本国家の関係
 - 3.1.6 マス・ジャーナリズムとは何か
 - 3.2 ネット・メディアとは何か (21世紀)
 - 3.2.1 世界観としてのネット・メディア (超越論のtopology)
 - 3.2.2 ネットとは何か
 - 3.2.3 ネットとプロパガンダ
 - 3.2.4 ネット・メディアとプロパガンダ
 - 3.2.5 ネット・ジャーナリズムとは何か
- 4. ネット・モノド論
 - 4.1 モナドの概念と定義
 - 4.2 ネット・モノドの概念
 - 4.3 ネット・モノド(personal)の定義
 - 4.4 日本国の位相史上のネット・モノドの位置
 - 4.5 ネット・モノドの対象とする監視・調査項目
 - 4.6 Topologyで右翼と左翼の関係を明確にする
- 5. 公私とは何か
 - 5.1 公私の最小単位
 - 5.2 マス・メディアでの公私とは何か
 - 5.3 ネット・メディアでの公私とは何か
 - 5.4 一神教の公私
 - 5.5 超越論 (汎神論的存在論) の公私
- 6. 二階層戦争論とメディア論の関係
 - 6.1 ネット・メディアの問題を二階層戦争論で考察する
 - 6.2 ネット・ヘゲモニー問題とは何か
 - 6.3 二階層戦争論による解決策
- 7. 政治形態と自由
 - 7.1 自由とは何か：私たちの自由およびlibertyとfreedomの違い
 - 7.2 公私の最小単位再説
 - 7.3 政治形態E&Aの公私：一神教のtopologyの政治形態
 - 7.4 政治形態Jの公私：高天原のtopology (超越論) の政治形態
- 8. 私たちは如何に生きるべきか
 - 8.1 学歴無用論
 - 8.2 学問有用論

青字は既論の章、赤字は今回論ずる章、黒字はこれから論じる章



縄文紀元論

Topologyで日本人を読み解く（5）

岩田英哉

目次

I 縄文紀元日本語論

1. 日本語と漢語の関係

- (1) 言葉と概念と文字の関係
- (2) 音義と日本語の概念の関係
- (3) 漢字とひらかな・カタカナの関係
- (4) 音義と五十音表の関係
- (5) 有文字文明と無文字文明

Intermezzo：何故日本にはキリスト教徒が全人口の1%しかいないのか？

2. 日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か

3. 五十音表を記号化する

4. 日本人の言語宇宙

【結論1】：習合とは何か

【結論2】：神社の鳥居とは何か

【結論3】：日本人とは何か

【結論4】：東国三社とは何か

【結論5】：竹取物語とは何か

【結論6】：富士山とは何か

【結論7】：日本語とは何か

【結論8】：第四紀とは何か

【結論9】：何故西暦1945年に日本は敗北したのか

【結論10】：海の民は何処からやって来たか

【結論11】：八咫鏡及び草薙剣とは何か

【結論12】 国体とは何か

5. 古事記の宇宙観

5.1 高天原とは何か1

5.2 カミとは何か1

5.3 高天原とは何か2

5.4 日本語の特殊の中の普遍

5.5 海の民のお祭りと超越論の関係

5.6 天照大神とは何か

5.7 カミとは何か2

5.8 月読命とは何か

5.9 三種の神器とは何か

5.10 春日大社の所蔵する「鹿座神影図」を読み解く

6. 和漢混淆文とは何か：御祓である。

IV 日本人の文明観

V Topologyで縄文土器を読み解く

0. 縄文土器の本当の正しい名前とは何か？

1. 紋様とは何か

2. 縄文土器の構成要素

3. 縄紋は縄目と渦巻き紋様で出来てゐる

4. 縄文土器は三階層で出来てゐる

5. 縄文土器には開口土器と閉口土器の二種類がある

6. 縄文土器は私たちの宇宙観を体現してゐる

7. メディア（媒体）としての縄文土器

8. 弥生式土器は二階層で出来てゐる

9. メディア（媒体）としての弥生式土器

10. 縄文土器と弥生式土器の関係（topologicalな連続性）：3（奇数）から2（偶数）へ

11. 銅鐸は7階層で出来てゐる

12. 縄文土器の政治と弥生式土器の政治：土器と政治の一体と分離：銅鐸とは何か1

13. 縄文土器の経済と弥生式土器の経済：土器と経済の一体と分離：銅鐸とは何か2

IV 21世紀の現代に縄文土器はどのように生きてゐるか



青字は既論の章、赤字は今回論ずる章、黒字はこれから論じる章

連載物・単発物次回以降予定一覧

- (1) 安部浅吉のエッセイ
- (2) もぐら感覚23：概念の古塔と問題下降
- (3) 存在の中での師、石川淳
- (4) 安部公房と成城高等学校（連載第8回）：成城高等学校の教授たち
- (5) 存在とは何か～安部公房をより良く理解するために～（連載第5回）：安部公房の汎神論的存在論
- (6) 安部公房文学サーカス論
- (7) リルケの『形象詩集』を読む（連載第15回）：『殉教の女たち』
- (8) 奉天の窓から日本の文化を眺める（6）：折り紙
- (9) 言葉の眼12
- (10) 安部公房の読者のための村上春樹論（下）
- (11) 安部公房と寺山修司を論ずるための素描（4）
- (12) 安部公房の作品論（作品別の論考）
- (13) 安部公房のエッセイを読む（1）
- (14) 安部公房の生け花論
- (15) 奉天の窓から葛飾北斎の絵を眺める
- (16) 安部公房の象徴学：「新象徴主義哲学」（「再帰哲学」）入門
- (17) 安部公房の論理学～冒頭共有と結末共有の論理について～
- (18) バロックとは何か～安部公房をより良くより深く理解するために～
- (19) 詩集『没我の地平』と詩集『無名詩集』～安部公房の定立した問題とは何か～*
- (20) 安部公房の詩を読む
- (21) 「問題下降」論と新象徴主義哲学
- (22) 安部公房の書簡を読む
- (23) 安部公房の食卓
- (24) 安部公房の存在の部屋とライプニッツのモナド論：窓のある部屋と窓のない部屋
- (25) 安部公房の女性の読者のための超越論
- (26) 安部公房全集未収録作品
- (27) 安部公房と本居宣長の言語機能論
- (28) 安部公房と源氏物語の物語論：仮説設定の文学
- (29) 安部公房と近松門左衛門：安部公房と浄瑠璃の道行き
- (30) 安部公房と古代の神々：伊弉册伊弉諾の神と大国主命
- (31) 安部公房と世阿弥の演技論：ニュートラルといふ概念と『花鏡』の演技論
- (32) リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
- (33) 言語の再帰性とは何か～安部公房をよりよく理解するために～
- (34) 安部公房のハイデgger理解はどのやうなものか
- (35) 安部公房のニーチェ理解はどのやうなものか
- (36) 安部公房のマルクス主義理解はどのやうなものか
- (37) 『さまざまな父』論～何故父は「さまざま」なのか～
- (38) 『箱男』論II：『箱男』をtopologyで解読する
- (39) 安部公房の超越論で禅の公案集『無門関』を解く
- (40) 語学が苦手だと自称し公言する安部公房が何故わざわざ翻訳したのか？：『写真屋と哲学者』と『ダム・ウエイター』
- (41) 安部公房がリルケに学んだ「空白の論理」の日本語と日本文化上の意義について：大国主命や源氏物語の雲隠の巻または隠れるといふことについて
- (42) 安部公房の超越論
- (43) 安部公房とバロック哲学
 - ①安部公房とデカルト：cogito ergo sum
 - ②安部公房とライプニッツ：汎神論的存在論
 - ③安部公房とジャック・デリダ：郵便的 (postal) 意思疎通と差異
 - ④安部公房とジル・ドゥルーズ：褻といふ差異
 - ⑤安部公房とハラルド・ヴァインリッヒ：バロックの話法
- (44) 安部公房と高橋虫麻呂：偏奇な二人 (strangers in the night)
- (45) 安部公房とバロック文学
- (46) 安部公房の記号論：《 》 〈 〉 () [] 「 」 『 』 「……」
- (47) 安部公房とパスカル・キニャール：二十世紀のバロック小説（1）
- (48) 安部公房とロブ＝グリエ：二十世紀のバロック小説（2）

- (49) 『密会』論
- (50) 安部公房とSF/FSと房公公安：SF文学バロック論
- (51) 『方舟さくら丸』論
- (52) 『カンガルー・ノート』論（済み）
- (53) 『燃えつきた地図』と『幻想都市のトポロジー』：安部公房とロブ＝グリエ
- (54) 言語とは何か II（済み）
- (55) エピチャム語文法（初級篇）
- (56) エピチャム語文法（中級篇）
- (57) エピチャム語文法（上級篇）
- (58) 二十一世紀のバロック論
- (59) 安部公房全集全30巻読み方ガイドブック
- (60) 安部公房なりきりマニュアル（初級篇）：小説とは何か
- (61) 安部公房なりきりマニュアル（中級篇）：自分の小説を書いてみる
- (62) 安部公房なりきりマニュアル（上級篇）：安部公房級の自分の小説を書く
- (63) 安部公房とグノーシス派：天使・悪魔論～『悪魔ドゥベモウ』から『スプーン曲げの少年』まで
- (64) 詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観（済み）
- (65) 安部公房の/と音楽：奉天の音楽会
- (66) 『方舟さくら丸』の図像学（イコノロジー）
- (67) 言語貨幣論：汎神論的存在論からみた貨幣の本質：貨幣とは何か？
- (68) 言語経済形態論：汎神論的存在論からみた経済の本質：経済とは何か？
- (69) 言語政治形態論：汎神論的存在論からみた政治の本質：政治とは何か？
- (70) Topologyで神道を読む（1）：祓詞と祝詞と結界のtopology
- (71) Topologyで神道を読む（2）：結び・畳み・包みのtopology

[シャーマン安部公房の神道講座：topologyで読み解く日本人の世界観]

- (71) 超越論と神道（1）：言語と言霊
- (72) 超越論と神道（2）：現存在（ダーザイン）と中今（なかいま）
- (73) 超越論と神道（3）：topologyと産霊（むすひ）または結び
- (74) 超越論と神道（4）：ニュートラルと御祓ひ（をほらひ）
- (75) 超越論と神道（5）：呪文と祓ひ・鎮魂
- (76) 超越論と神道（6）：存在（ザイン）と御成り
- (77) 超越論と神道（7）：案内人と審神者（さには）
- (78) 超越論と神道（8）：時間の断層と分け御霊（わけみたま）
- (79) 超越論と神道（9）：中臣神道の祓詞（ほらひことば）をtopologyで読み解く：
古神道の世界観
- (80) 三島由紀夫の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
- (81) 安部公房の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
- (82) 『夢野乃鹿』論：三島由紀夫の「転身」と安部公房の「転身」
- (83) バロック小説としての『S・カルマ氏の犯罪』
- (84) 安部公房とチョムスキー
- (85) 三島由紀夫のドイツ文学講座
- (86) 安部公房のドイツ文学講座
- (87) 三島由紀夫のドイツ哲学講座
- (88) 安部公房のドイツ哲学講座
- (89) 火星人特派員日本見聞録
- (90) 超越論（汎神論的存在論）で縄文時代を読み解く
- (91) 「『使者』vs.『人間そっくり』」論

編集後記

目次

- 『周辺飛行』論（24）：仮面について——周辺飛行21：何か舞台藝術を肴に、同時に読んでみたこともあつて『他人の顔』論の凝縮（エッセンス）を読んでみるやうな気がしました。ジャンル横断・越境者安部公房の面目躍如。
- AS TRANSTEXTUALIDADES NA OBRA *O ROSTO DE UM OUTRO DE ABE KÔBÔ, COMO O DISCURSO DO MONSTRO* [ポルトガル語によるご寄稿]：間テクスト性におけるモンスター・スピーチとしての「他人の顔」：悔しいが日本の読者には書けない『他人の顔』論。私たちに足りないのは、安部公房のいふ仮説設定の文学として読み論ずるといふ態度ではないでせうか。
- Topologyで日本の文化を解説する「内なる辺境」シリーズ（7）：紐（ひも）：表紙にあつたものを本体に取り込みました。次号以降ここで論じます。縄文文化論を下敷きに論ずることになります。縄文紀元論と併せてお読みになると一層日本文化の理解が深まるのではないでせうか。安部公房の文学を土台にして、あなたも時代の組み替えを組紐では如何？
- 安部公房の愛読者のことを何と呼ぶか：今までもメモをまとめました。まあ、なんと呼ぼうが呼ばれやうが、安部公房の読者のことですから透明人間で無名で名付けやうなどありません。それを押して尚試みたる愚かなる試みです。
- Mole Hole Letter*（46）鯨と雁 ～疫病・戦争・共産主義～：明治の人はいいことをいふなあと思ひつつ筆が進みました。今世に流行るのは群れなす赤い雁ばかりである。きつと撃つて肉を食してもさぞ不味からう。まともに論ずるだけ時間の無駄であるが、放って置くと益々世の中に害が及ぶので放って置くわけにも行かぬといふ唾棄すべき鶴（ぬえ）のやうな群雁である。
- ネット・メディア論（6）：おやすみです。もぐら通信の適当なるページ数は50ページから60ページです。これを超えると私の校正ミスが最低3つ起きるのです。
- 縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（5）：同じ理由でおやすみ。待て次号。



次号の原稿締切は超越論的にありません。いつでもご寄稿をお待ちしています。

差出人：

廣安部公房

〒182-0003東京都調布

市若葉町「閉ざされた無

限」

次号の予告

1. 『周辺飛行』論（25）
2. 縄文紀元論（5）
3. 私の本棚：西尾幹二著『あなたは自由か』を読む～自由と奴隷について～
4. 哲学の問題101（11）：愛（Liebe：リーベ）
5. 大久保房雄を読む（1）：文壇とは何であつたか
6. サンチョ・パンサを求めて（4）：ドーナツの穴になつた話

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、コロンビア大学東アジア図書館、「何處にも無い図書館」

【もぐら通信の編集方針】

1. もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
2. もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
3. もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。
4. 編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。

